

第8回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第8回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇一二年度第8回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただき、まことにありがとうございます。今回も日本国内および世界から四五〇篇の作品が寄せられ、十代から八十歳代までと、幅広い世代にわたったばかりでなく、地域的にもアジアやヨーロッパ、南北アメリカと世界近の科学の先端の記録も多く寄せられ、よい作品が実にたくさん集まった、充実したコンテストとなりました。

例年の通りまず選考委員会選担当による第一次・二次選考、続いて第三次選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、福岡哲司、都築隆広、五十嵐勉五人の選考委員によって討議されました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞、入選作も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。御期待ください。

第9回「文芸思潮」エッセイ賞は明年もほぼ同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って御応募ください。

なお授賞式は明年一月二十六日(土) 大田区民プラザで行なわれる予定です。どうぞ御出席ください。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「祖母のはなし」

ハムダなおこ (アラブ首長国連邦)

「氷柱の涙」

岬健太郎 (大阪府寝屋川市)

「音楽にすぐわれるもの」

松岡久仁子 (東京都杉並区)

優秀賞

「泥棒市のヨガ行者」 ならはたかし

(オランダ・スヘルトーヘンボス市)

「アヒルが消えた日」 むかいはつこ

(神奈川県横浜)

「関心は半病床の中」 村上 柊 (東京都多摩市)

「鉄塔」 さいとうみち子 (神奈川県横浜市)

「虹色のチマチヨゴリ」 森千恵子 (福岡県福岡市)

「空へ登る汽車」 田中濱子 (大阪府豊中市)

「みたらし団子」 奥田 登 (京都府相楽郡)

奨励賞

「シックマザー症候群」 栗山恵久子 (東京都府中市)

「シヤレコウベの望郷」 西島雅博 (東京都三鷹市)

「精神科病棟を出て」 寺内なつき (東京都中野区)

「妹、志津の失明」 印南房吉 (神奈川県横浜市)

「開運日」 若草田ひずる (鹿児島県肝属郡)

「左腕を追いかけて」 藤田陽子 (神奈川県厚木市)

「鼻垂れ小僧でありたい」 佐藤隆定 (岐阜県美濃市)

「二条市場とかくまき道」 金田一淳 (青森県三戸郡)

「病院の廊下」 奥畑信子 (大阪府東大阪市)

「三人の少女」 佐久間恵 (東京都墨田区)

「東京学生会館にいた頃」 小林俊英 (神奈川県横浜市)

「古い金庫と命の重さ」 ゴルビー長田 (神奈川県横浜市)

「枝豆と私」 三枝花里 (埼玉県所沢市)

「角封筒」 山崎文男 (長野県上田市)

「のんべえとウソべえ」 山田まさ子 (東京都国立市)

「つまづきこそ」 早川実花 (佐賀県佐賀市)

「父の手」 美山有希 (福岡県福岡市)

「瘤の声」 山崎人功 (長野県安曇野市)

「祖母の置き土産」 木村令胡 (福島県会津若松市)

「夕陽のなかのドン兵衛」 榎並翔水 (広島県広島市)

「褪せた空手着」 斎藤 望 (北海道紋別市)

「介護はバラ色」 外山寛子 (神奈川県横浜市)

「千変万化」 鈴木綾子 (徳島県小松島市)

「赤まんまの絆」 安江康治 (岐阜県岐阜市)

「最後の仕事―白血病と闘った先生に捧ぐ―」 星野夕子 (千葉県我孫子市)

「一勺」 よすみこうすけ (大阪府高槻市)

「プリンセス・トヨトミ」と大阪への旅」 酒井恵三 (石川県金沢市)

「空白の心境」 木戸竜之介 (栃木県那須塩原市)

科学記録特別賞

「小惑星探査機『はやぶさ』が持ち帰ってきたもの」
漆畑辰斗（静岡県駿東郡）

社会批評奨励賞

「自動車の安全装備に対する提言」
志村紀昭（愛知県名古屋市長古屋市）

「ナースあがり」
小野友貴枝（神奈川県秦野市）

「地方国立大学の教育力・研究力を向上させるための
穏健なる提案」
邪馬知賢（岡山県赤磐市）

佳作

「月夜のウサギ」
高岡啓次郎（北海道苫小牧市）

「届かない手紙」
かまだまこと（北海道札幌市）

「オレンジ色の夕焼け」
宇田一紘（東京都練馬区）

「冬の月」
中谷万勲（福井県福井市）

「三十路をゆけば」
林 由貴（北海道札幌市）

「さらば9407番」
凹田連三（山梨県笛吹市）

「『お盆』は古代インド語」
小笠原幹夫（埼玉県狭山市）

「粋な計らい」
岩谷隆司（三重県亀山市）

「ある記憶喪失」
本松秀茂（福岡県北九州市）

「わが家の電化の歴史」
菅宮慶江（千葉県銚子市）

「懐かしい空母葛城」
郷 芳美（鹿児島県鹿児島市）

「老愁」

「バーヤアンジンさん」
原石 寛（神奈川県横須賀市）

「命の花咲く」
横笛存生（大阪府河内長野市）

「追いかけていた白の意味」
鳩 平和（兵庫県姫路市）

「今だし母の戦後」
橘 宮道（福岡県福岡市）

「時空の雑器」
谷 都留子（東京都杉並区）

「五十才のラブレター」
川西葉吉（岐阜県多治見市）

「母と一粒の米」
志村美子（福岡県福岡市）

「父母蛙」
成瀬富貴子（岐阜県各務原市）

「茶摘みのころ」
南條美起子（埼玉県越谷市）

「ホワイトデー」
徳重総章（埼玉県行田市）

「ハム」
七里彰人（愛知県安城市）

「僧侶になった君と」
三田村正彦（京都府京都市）

「娘と私」
坂上翔馬（埼玉県川口市）

「二十七年目の結論」
西田美智子（東京都八王子市）

「原郷、小さき漁港にて」
永田俊英（茨城県銚田市）

「彼氏いない歴30年が語る、
いいフラれ方と悪いフラれ方」
日野笙子（北海道札幌市）

「アイ・ラブ・スカイ」
羽田スウ（東京都練馬区）

「衰えた目玉からの、意外なプレゼント」
竹内秀子（栃木県宇都宮市）

「どいっち」
佐藤義弘（福島県いわき市）

「風花」
村田和哉（福岡県福岡市）

「二匹と二人」
舟橋空兔（愛知県尾張旭市）

「かぼちゃ団子」
池山弘徳（宮崎県都城市）

大樹独活（三重県四日市市）

「白く輝いたおにぎり」
田賀せいし（北海道石狩市）

「紫色のかすみ草」
小林明子（北海道札幌市）

「安喰善作」
高見けい（東京都杉並区）

「スワンの旅立ち」
森 幸夫（福岡県福岡市）

「日印の狭間で」
藤沢梨沙（大阪府堺市）

「明日への希望」
太田美年子（神奈川県横浜市）

「きもの」
中 他見男（大阪府大阪市）

「今日は持つて行かんのか」
守屋正雄（東京都町田市）

「ムクヤ」
神谷久香（高知県吾川郡）

「ギプスとエンコウ」
宮前寿子（石川県加賀市）

「霧のくに随想」
坂本吉史（大阪府大阪市）

「逆走」
山田吉生（栃木県宇都宮市）

「思えば遠く来たもんだ」
塩坂佳子（東京都板橋区）

「再生の空」
清水雅子（岩手県盛岡市）

「63年前の恐怖の一夜、そして大震災」
清尾博子（福井県福井市）

「思いがけないプレゼント」
古野明子（福岡県福岡市）

「湯けむりの中のわが故郷」
坂本かつえ（山梨県北杜市）

「チェリーピンクの車」
下村きよ子（千葉県千葉市）

「『歌会始の儀』預選者として」
峰 裕（東京都墨田区）

「熱油」
井上幸子（岡山県津山市）

「丸い背中」

「夕闇のロンド」

言葉の力



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79「流謫の鳥」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

五十嵐 勉

第八回エッセイ賞には昨年より一二篇多い四五〇篇の応募があった。全体として中位、上位に良い作品が増えて、総体としてのレベルが一段と上がった印象がある。力作が多い。三次予選以上が一〇〇篇以上で、どれもみな魅力があつて、高いレベルに達していて、落とすのに難渋した。それぞれの作品に人生の姿が深く刻まれていて、それぞれに深い思いが込められている。感心したり、納得したり、共感したり、涙を誘われたり、実に多様な体験に触れさせてもらつて、あらためて人生の深さに感動させられた。言

選評

葉によって表現されたそれらを共有するところに文学の意味があり、そこに新しい力が生まれてくる豊かな土壌がある。残したいもの、多くの人に読んでもらいたいもの、それらをまたエッセイ宇宙などにも掲載していたら、心の力の環を結んでいただきたい。

胸の奥底にまで届く言葉の力を特に感じた作品は、ハムダなおこ氏の「祖母のはなし」と岬健太郎氏の「氷柱の涙」だった。

「祖母のはなし」は、アラブの世界へ嫁ぐ女性の内面の苦悩が空港からかけた祖母への電話の声によって救われ、その結びつきのなかに遠くアラブから祖国との絆を見いだして、さらに祖母という存在の意義を新たに発見していく内容だが、作品に流れる切々たる思いは、アラブと日本を繋ぎ、異空間を越えるだけの強い真情が感じられた。たんに国際結婚の労苦を越えて、「祖母」という存在に新たな意味を発見して、自身の生き方の方向にしているところがとても新鮮だった。こういう力が真の国際化を担うのであって、口先や小手先のことではない本物の力の輝きを覚えた。

「氷柱の涙」は東北の津波の犠牲者の一シーンを死体を掘り起こすボランティアの立場から伝えている作品である。瓦礫に埋没した中行方不明者を探す苦労も現場のリアリティを持って迫ってくるが、それ以上に、妻であり母親である一個の人間の喪失を、家族が受け入れる場面の肉声は、強烈に胸を打ってくる。この女の子の発する言葉の中に、津波という自然災害の惨酷な一面が露出ししている。東北の津波に関しては、小説やレポートなどかなりの数の作品を読んできたが、この一シーンほど強烈に胸を打つ作品はなかった。文章は稚拙であり、構えているところ

もあって、生硬だが、伝えるべきものを伝えているという点で評価した。最優秀賞はもう一つあって、松岡久仁子氏の「音楽にすくわれるもの」が選ばれたが、家族の危機的な状況をむしろ音楽に埋没することで乗り越える話は、貴重な体験で、疲労困憊の生活の中で逆に鳴り響くファンファーレのような陶醉狂想の世界は、音楽体験者だけが持つ救いの力だろう。言葉の力は少し弱いかとも思ったが、各選考委員から満遍なく票を集めた手堅い作品だった。

描写の力が特に優れていて、引き込む力が圧倒的だったのは、優秀賞の「泥棒市のヨガ行者」（ならはたかし）である。刃物を胃の中に吞み込む場面は圧巻で、行者の苦行とその修練の力を余す所なく伝えてくる。見物客の俗な興味の視線の中での苦行が、逆に聖なる高みに押し上げられていく。この迫力は描写という点で応募作品中最も優れていた。しかし最後観客のほとんどがスリに遭う事件を持ってきたのは興醒めで、行者の苦行が伝えてくる聖性が、盗難という俗事によって汚される結末になってしまっている。惜しかった。

同じく優秀賞の「アヒルが消えた日」は幼い日のアヒルによって通学を妨げられる日常の難儀が、一転してアヒルがすべて食べられるために消失した事件に直面して、世界が逆転してしまう。動物と同居していた幼児世界から大人の現実を突きつけられる体験を明快な筆致で描いたもので、好印象だった。歯切れのよさと読後感は抜群。最後の一行の「私たちは、人間になった」という言葉が、決めすぎている印象があつて損をした。文章の力量は買う。

「関心は半病床の中」の村上柊氏は、これまでのエッセイ賞の優秀賞以

入選

- 「源さん」 山田和彦
- 「ある錯乱の記憶」 竹越あきを
- 「人の縁」 長坂隆雄
- 「空」 榎 明子
- 「遠い『くに』の友」 原 節子
- 「母の家」 山県大慈
- 「深界」 山吹たかし
- 「カカ」 木下日真子
- 「冬のセキレイ」 吉田宏子
- 「人相の本」 渡邊 敏
- 「昼休みの二考察」 可孤島育途
- 「額のぬくもり」 世波場葉
- 「今晩は」 飯島もとめ
- 「児童虐待が跡を絶たない。」 鈴木幸子
- 「さよなら子宮」 ほり けい
- 「Kへ」 こもも
- 「螢」 土山育司
- 「天使は健在？」 錦織佳代子
- 「秋桜忌」 白楊風子
- 「白い割烹着」 浜木綿
- 「ほんのひととき」 宮尾美明
- 「スタート ミー アップ」 小野寺悠記
- 「クラウン・カレッジ」 森 響子

社会批評賞入選

- 「ぬくもり」 松田いくみ
- 「光の差すほうへ」 櫻輝
- 「生きる」 河合千都
- 「大地に充ちる歌」 神戸朋子
- 「14才の記憶」 稲葉まき
- 「困む食卓」 古川 鯉
- 「時の流れは早すぎて」 堤 京子
- 「反比例する進歩と廃退」 ゆりかゆみか
- 「手すりは必要か」 小林理樹
- 「本当に大切なこと」 滝川正巳
- 「学力低下は氷山の一角」 富嶽庵
- 「絶望からの出発―愛の力」 金井秀子

上の受賞者のなかで最年少だが、その文章はユニークな発露がある。それは閉鎖感のなかでは、たく自在な発想の飛翔感を伴っている。才能と状況とを併せ持ったうちに展開される文章の魅力は一見新鮮であるが、「あばずれ」という言葉に表されるようなきわどさもある。紡ぎ出される言葉の発露に魅力があるものの、方向を間違とうと文学ヤンキーで終わってしまう危険もあるだろう。方向を見失わないでほしい。

「鉄塔」（さいとうみち子）の「拒食症」という精神的危機を多摩川の土手とその向こうに立つ鉄塔の存在感によって克服するストーリーは、内面の危機の乗り越えを劇的に展開していて、自身の基盤を掘り下げていく。こういう乗り越えは一生のうちにもそう何度もあるものではない。この深い体験を通して得たものへの愛惜は、命という自分自身へのいととしき、そしてそれを与えてくれた大いなるものへの融合感となって、これからの人生の豊饒を想像させる。筆者にとってもかけがえのない作品だろう。

在日朝鮮人との付き合いを描いて出色だったのは、「虹色のチマチヨゴリ」（森千恵子）である。うまい塩辛を通して人間として付き合い合う祖父とK君一家に対し、周囲の日本人の目は冷たい。しかし祖父と同じように自分もK君と付き合っていて、いじめられるK君をかばう。そのお礼にお姉さんの結婚式のチマチヨゴリの美しい姿を見せてくれるシーンは目に焼き付いて離れない。七色のチマチヨゴリの鮮やかな色彩がいつまでも心の中に残る作品で、国を越えることの心の光のなかで、まぶしく輝き続けている。

奨励賞の中でも、ほとんど優秀賞に値する作品も少なくなかった。栗山恵久子氏の「シックマザー症候群」は、障害のある我が子との苦闘を、発見によって運命を大きく変える刻印の深い作品で、読み応えがあり、また教えられることが多かった。ずしりとした重みが残る。

「涙垂れ小僧でありたい」（佐藤隆定）は美容師志望の青年が、恋人の絶えようとする寺の跡を僧として継ぐ過程を描いたもので、せちがらい乾燥した現代の中でのすがすがしさがひととき光る。いい話である。

「開運日」（若草田ひずる）は宝くじを引き続けて一攫千金の夢を思い続ける父の話がおもしろい。夢を思い続ける人間の一面が露わになっている。

今年八十三歳を迎える印南房吉は今年も「妹、志津の失明」で奨励賞に輝いた。エッセイ賞が発足してから、連続八回の受賞である。なかなかできることではなく、たくさん運命の荒波を乗り越えてきた印南氏の人生体験の豊かさをあらためて感じさせられた。心から祝意を送りたい。この点では藤田陽子氏の波瀾万丈の人生も注目に値する。「左腕を追いかけて」も不運と乗り越えが大きな感動として結ばれている。何度も受賞しているその背後には、幾多の荒波を越えてきた真の光が輝いている。

今年には社会批評の分野に痛烈なものも少なく、奨励賞に留まったが、「自動車の安全装備に対する提言」（志村紀昭）や「地方国立大学の教育力・研究力を向上させるための穏健なる提案」（邪馬知賢）は、建設的な提言で、実行可能な身近さを備えている。ぜひ実現の方向に行ってほしいものだ。「ナースあがり」（小野友貴枝）も現実の体験に踏まえて行政の側面をよく捉えている。

今回の作品の中には、精神の病を乗り越える作品が特に若い層にいくつも見られ、一つの特徴をなしていたことも見逃せない。「鉄塔」もある意味ではその領域に属するものだろうし、予選でもいくつもあった。奨励賞の「つまずきこそ」（早川実花）や「精神科病棟を出て」（寺内なつき）は、その代表的な作品である。ナイーブさや傷つきやすさを孕んだ精神の狭間の孤独な心の震えが、一つの緊張感として伝わってくる同時に、それを追い詰める現代社会のドライさや苛酷さも浮かび上がってくる。

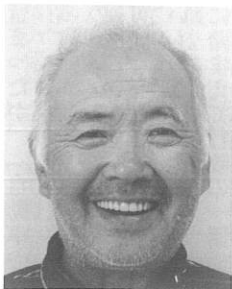
記録性という点では、満州の引き揚げ者の聞き書きを扱った「シヤレコウベの望郷」（西島雅博）も圧倒的な体験の重みを備えていた。敗戦と引き揚げというすさまじい現実がここにあり、生きるということの妻も伝わってくる。ただ、聞き書きの形がまだこなれていず、生のままだったので、もっと文章化してわかりやすく、臨場感をもって書けば、さらにその現実が伝わってきただろう。磨きが可能なお品で、惜しい。

「三人の少女」（佐久間恵）は子供の世界の異質な存在から現実を浮かび上がらせている特異な作品で、おもちゃの世界から大人になることのグロテスクさを照射している視点がいい。この視点を保持して書き続けていけば、一つの世界が展開しそうである。むずかしいことだが挑戦してほしい。

社会批評ではないが特に優れた報告になっていたのは「小惑星探査機『はやぶさ』が持ち帰ってきたもの」（漆畑農斗）で、最先端の宇宙船技術の労苦とダイナミックな動きが描かれていて、たいへん勉強になった。普段伝わってこないこういう領域を一般の読者に提示していただくとはきわめて大事だと思う。科学記録特別賞を贈って感謝を述べたい。

ここに書けなかったが、注目すべき作品、触れておきたい作品はまだ多数あって、割愛せざるを得ないことをたいへん残念に思う。この豊かなエッセイの実りを、人生の充実としてたくさんの人と共有していきたい。今回の作品の豊饒は、あえて入選の上に佳作を設けて賞揚しなればならないほどの大収穫だったことを付言しておきたい。





みずき りょう

- 1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
2006 小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞
07 小説「海老フライ」で第19回労働者文学賞受賞

今年も咲いた色々な花

水木 亮

毎年どんなエッセイが集まるか楽しみにしている。今回も若い人から高齢者までいろいろな作品が寄せられ、文章が初々しくきらりとひかる「関心は半病床の中」(村上柊・二〇代)から、しみじみとした人情話の「みたらし団子」(奥田登・八〇代)まで様々な花が咲いた。

最優秀賞の「音楽にすくわれるもの」(松岡久仁子)は、音楽のもつ力について書いている。震災の瓦礫の上で炊き出しをしているとき、譜面台を出して演奏することが果たして救いとなるか、という現実在即した問いかけをしている。前半部分は作者の音楽家としてのやや個人的な発想とも思える。言わんとするところはわかるが、例え作者の言う温泉的な音楽にせよ、被災者のために何かしたいという

人びとの強い思いを否定出来ない。

このエッセイのよさは、ガンの夫を支えて音楽の力に癒されながら、闘いつつ生きるその生きざまにある。経済的にも精神的にも追いつめられる生活の苦しさの中で、究極に音楽が自分を支えてくれる。ならばそのように、癒される音楽を今度は震災にあった人びとにどのように届けられよいか。それこそ書いて欲しい。

同じく最優秀の「氷柱の涙」(岬健太郎)は大震災の体験記を書いた。ここには経験した者でなくては分からない、事実の重さがある。ただ、体験イコール感動ではない。

優秀賞の部では「空へ登る汽車」(田中濱子)は、母親恋しさに駅に汽車を見に行く妹の話で泣かせる。童話も書ける人かもしれない。「関心は半病床の中」(村上柊)は、きらりとひかるなかなか魅力的な文章で期待される。力もあり精進して欲しい。「みたらし団子」(奥田登)はエッセイというより小説に近く、洗濯屋に奉公にでた少年が洗濯物の配達に失敗し困っていると、女衛が金をくれたり、女郎たちが金を出し合う庶民の人情話である。特に女たちの言葉(方言)にとっても味がある。

「虹色のチマチヨゴリ」(森千恵子)は、祖父が塩辛作りの名人の韓国人のKさんと親しかったが、作者はその子供のK君と同級生であった。子供達にも当時差別があり自由に交流できなかった。姉の花嫁衣装を見て欲しかったK

はエッセイのツボを心得た一品である。

その年その年で作品に出来不出来があるのは誰にでもあることだ。そして前回入賞した人がさらに入賞するには、前回以上の力が求められると言える。そうしたなかで、このコンクールには毎年継続して応募される方がいて頼もしい。「継続は力なり」——印南房吉さんや榎並掬水さんの持続的な執筆力は、ますます冴えていて見事である。また来年を期待している。

君、弟と仲良くしてくれたことを感謝する姉。今でこそ韓流ブームだが、差別の厳しかった時代をよく描いている。「アヒルが消えた日」(むかいはつこ)は、余程忘れられない幼い日の事件だったのだろう。喧嘩していたアヒルが突然消える。それは売られたためだった。アヒルは明るくにぎやかなイメージがある。だからそれが消えたとき印象が強烈である。胸を打つよいエッセイで、童話も書ける人だと思ふ。

奨励賞の「妹、志津の失明」(印南房吉)は、失明するかも知れない妹の目の手術。「失明も失脚も天災である。腹を固めてぶつかるしかない」人生経験豊かな作者の言葉が力強い。

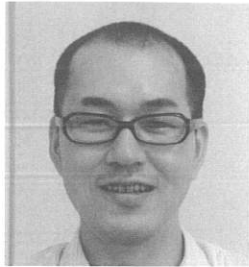
また「夕陽のなかのドン兵衛」(榎並掬水)は愛する老犬に寄せる、作者の思いが切なく込められている。最期を庭の石に同化する発想は、人間は石に行きつくと言うがそれも自然である。まさに「文芸思潮」の中心読者の核心を突いているエッセイである。

その他印象に残ったエッセイは、「一勺」(よすみこうすけ)は、焼酎を一勺かきまじする様子がよい。「二条市場とかくまきの道」(金田一淳)は、母親のかくまきの中はどんなに温かかっただろう。「ナースあがり」(小野友貴枝)は、思うことをはっきり述べて文章に勢いがありとても頼もしい。「今日は持つて行かんのか」(中他見男)



艶笑唄

水木亮 編著



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ハネムーンきどり」(三田文学)他 月刊「望星」書評員 現在 TV のナビ番組などの構成作家としても活動中

経験か、技術か、金的か？

都築隆広

いち投稿マニアへとたち返り、自分がこのエッセイ賞に応募するなら、どんなものを書くだろうかと、たまに夢想します。考えた挙句、書き出しは「まだ時効にはなっていないが、自分は過去にこういう犯罪を犯したことがあります……」もしくは「僕の友達にはこんな泥棒がいて……」あたりが、不謹慎な話ですが、私が読者なら続きを読みたいと思いました。

危険な「すべらない話」を披露し、読者の眼を惹くのもテクニクの一つ。こうした手管を「文学的金的」と私は名付けています。数々のコンクールに応募してきましたが、上位を牛耳るのはたいいてい文科大臣賞受賞作文の如き優等生達の作品で、そうしたインテリ共を破るには、泥をぶつ

けて目を潰し、金玉を狙う一撃必殺はありません。……と書こうとしたら、奨励賞の「のんべえとウソべえ」に出くわしました。出てくるのはイリーガル寸前のダメ人間ばかり、書いてあることもダメなことばかりと、まさに金的を喰らわせる作品で、作者の山田まさ子さんには金網デスマッチのチャンピオンのような風格すら漂います。

しかし前年度の「わたしのメルトダウン」に比べますと、いささか雑な印象もありました。村上龍でいうところの、「限りなく透明に近いブルー」の次に「海に向こうで戦争が始まる」を読ませられたようなパワーダウン感もありました。村上龍は三作目に「コインロッカー・ベイビーズ」を書いて一世を風靡しましたが、さて、山田さんは？

その昔、淀川長治が「第三の男」の解説で、「映画の教科書のような作品で、良過ぎて好きにはなれない」という主旨の寸評を述べていましたが、最優秀賞となった「音楽にすくわれるもの」にも同じものを感じました。共感ができ、文章表現も高度で、まさに音楽を奏するように読ませるエッセイです。それでも、上手過ぎるといいますか、遊び心が足りないというか、これ一本だけを推す気には、どうしてもなれません。ただ、自己完結的になりがちな後半を新聞のコラム風の前半が補い、客観性を持たせている点はとても見事です。

同じく最優秀賞の「氷柱の涙」は事実の重さでは他作品よりも見事な点に、現代つぼさがあります。これまでの国語教育では教師や学者が指導していたため、ただ優等生っぽい文章さえ書けば褒められたのですが、創作学科では作家が教鞭をとるので、評価される作品の幅がぐっと広がりました。

さて、前年度の最優秀賞「母と赤い鼻緒の草履」は事実(経験)の重さが勝ったと選評にも書いたのですが、今年はその単純にはいきません。技術と内容のバランスがとれた「音楽」や豊富な人生経験を元に書かれた「氷柱の涙」と「祖母のはなし」に対し、若い才気と技術が煌く「関心は半病床」を下にすべきなのか、上にすべきなのか。選考会では激論が交わされました。結局、評価はすべきだが、褒め過ぎもよくないという結論に達し、優秀賞です。

続いて、手塚治虫や藤子F不二雄に影響を与えながら、今ではほとんど読まれなくなってしまう大作家、海野十三の未亡人について書かれた奨励賞「千変万化」は一読の価値ありの名エッセイです。優秀賞「みたらし団子」も「人買い」という、いわば悪役がする善行に微笑まじさを感じて推薦しました。

さらに前述の山田さんは勿論、「精神科病棟を出て」「シツクマザー症候群」「鉄塔」など、アスペルガーや精神病を扱った、いわゆるメンヘル系の作品に良作が多かったのも今回の特徴です。客観的な分析を必要とし、読者や

を圧倒していました。けれども、「！」が多かったり、文章技術の点でも気になる点があります。作者が警察官ということもあってか、作品にどこか警察的なカタさや滲み出ていると感じるのは公務員への偏見でしょうか？

さらに当選作「祖母のはなし」もアラブに嫁に行くという経験が何より面白く読ませるのですが、どことなく説明不足で、せつかくの祖母との思い出も、一場面だけを切り取って見せたかのような印象の作品になってしまったのが、私は残念でした。

順位こそ下ですが、優秀賞「関心は半病床の中」の技術の高さには驚かされました。作者の村上さんは日大文芸学科の学生です。米国では大学の創作学科が作家への登竜門になっていくと聞きますが、日本でもやっとな創作学科がで

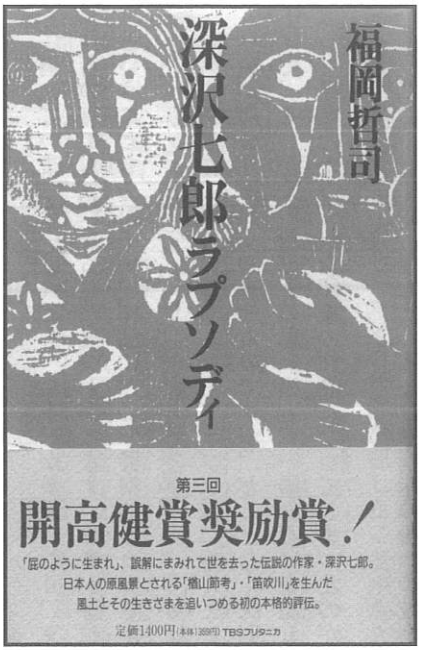
き始めてきました。かくいう私も、東海大学文芸創作学科の設立直前に前身となる授業を受けてきた、いわばゼロ期生です。

だからこそ感じるのですが、これは大学の創作学科が作り出した文章です。勿論、作者である村上さん自身が培い編み出した文体なのですが、大学は今、こうした文章が書ける学生を全国から募っています。創作学科で施される文学教育はどんどん高度になっていて、この作品ももしかしたら今、日本で最先端の創作技術で書かれた文章なのかも知れません。ポイントとしましては、優等生の文体で、あ

編集者から厳しく叱責される文学は、うつなどの精神病を患った方々には荷が重いのではないかと昔は私も思っていたのですが、ここ数年のメンヘル作品の充実ぶりに認識を改めました。心が病んでいても、いや、病んでいるからこそ書ける作品があります。選考会では「メンヘル賞」を作るべきだという声すら出しました。

最後に一作、奨励賞の「古い金庫と命の重さ」。作者のゴルビーさんはペンネームが印象的なので昨年の応募作も覚えていたのですが、わずか一年で別人かと思われるほどの成長が見られ、今年は見事受賞となりました。奨励賞というより、努力賞を差し上げたい。

経験か、技術か、金的か……そして努力か。受賞に至る道筋は十人十色でした。



ている。面白みのない程細々と。けれども、これだけでは「説明」ではあってもエッセイにはならない。しかも、作品を教書くのに即応できるほど個人的「事実」が無尽蔵であるわけではない。年配者の談話に繰り返しが多く、周囲の者の耳朶を素通りという事態は、書きことばのインパクトに於いても無縁ではない。

「事実」と、その「事実」に面した際の自らのけれんのな「感情」とが揃って、読み手は初めて文章作品に感情移入しやすくなる。もちろん「感情」だけを縷々つづっていくのも、エッセイではあり得ない。

「事実」と「感情」。読む者が最後の一文まで釘付けになりながら、大きな共鳴を得られる(いわゆる「読ませる」)文章には、ほかに欠かせない魅力がある。今さら言うまでもないことだが、周到な「描写」だ。風光であれ、表情であれ、季節であれ、過不足のない「描写」の魅力は大きいし、読んで得をした感じになる。これを手に入れるために、エッセイそのものではなく、二〇〇字ほどのスケッチ文を書いては仲間と交換して読み合っている者もいる。悪魔メフィストフェレスに唆されたファウストではないが、「お前は美しい」と時間を止めようと願う代わりに、一瞬を、あるいは細部をことばによって描き留める修練をするのである。

文章リアリズムには「事実」と「真実」が不可欠だ、と



ふくおか てつし

1948 山梨県甲府市生れ
樋口一葉研究会員、都留文科大学非常勤講師
著書「評伝深沢七郎ラブソディ」(TBSブリタニカ第3回開高健賞奨励賞)「遠い散歩近い旅・山梨文学散歩」(山梨ふるさと文庫)ほか
「猫町文庫」編集発行人

「描写」の魅力

福岡哲司

七九篇の最終選考通過作品を読んだ。作品の平均的なレベルは上がっているものの、ぐっと胸を衝かれるような作品はないという印象だった。応募してくる人がベテランであつたり、「常連」が増えてきたりすると、また、エッセイサークルで研鑽している人がいよいよ「応募」を目ざし始めると、得てしてこういうことが多くなるようだ。このことも無縁ではないが、七九編を読みながら、いくつかは、特徴的な、しかも書き手はそうとは思わず、けれども、エッセイとしては致命的な欠陥のあることに気づいた。個々の作品に及ぶ前に、初心に返るようなことだが、その点について指摘しておく。

多くの作品に経験や見聞に基づく「事実」説明はなされ分かったような分からぬような古来の御託説を聞いたことがあるが、「真実」を裏付けるものは個人的な「感情」ばかりではない。主観的でありながら、結果として客観的な「描写」も文章表現を「真実」化するのに大きな力がある。書き慣れることは、厳に警戒すべきことである。

もう一つ、かなりの応募作で気づいた点だ。むやみに改行する癖である。改行して一字下げれば、これは段落だ。文字・ことば・センテンス・パラグラフと重ねていった結果としての意味のまとまりである。気づいたのは、改行するが、字下げはしない、すなわち次の段落に移ったわけではない改行、「分かち書き」とでも言いたいような表記の多さだ。これはなんだろう。学生のレポートに時々こういう表記が交じって、決して彼らのためにならぬから、私は徹底的に駆除することにしていく。携帯メールやフェイスブックやブログをはじめとするSNS上での表記法の悪影響がここに至るまで到達したかと憂鬱になるほどである。

この「分かち書き」の弊害は、勿論、視覚的なことだけではない。しつかりとものを言い切らず(表現しきらず)、毎行ツイット(眩き)しているような、責任を持たない表白という印象を嫌うのだ。一生懸命に聞いていたら、その度に「なんちゃって」と言われれば腹立たしくもなるだろう。無意味な分かち書きには同様な不快感を感じる。しつかりした段落意識を持たないのは、散文の表現としては優

れたものではない。

最後に、結末を教訓で結ぶエッセイほどつまらないものはない。ここまで選考を通じてきた中にもたまにそれがあから呆れてしまう。「作者は何を言いたいのか」「この文章の主題は何か」と学校教育でやられすぎてそうなるのなら困ったことだ。何かを訴えたい文章（主張）もあれば、己のまなざしや意識の持ちよう（認識）を表現する文章もあるのだ。

私事だが、長く起きられなかった病の床の中で、以上のような散文意識、段落意識、描写の醍醐味を感じながら、あらためて滋味あるお手本のように繰り返し噛みしめたのは次のような本たちだった。夏目漱石「彼岸過迄」寺田寅彦（冬彦）「随筆集」武田百合子「遊覧日記」「日用雑記」森田たま「もめん随筆」ほか……。

印象に残った応募作を挙げる。

田中濱子「空へ登る汽車」。ひとつの家族の空気を如実に感じさせてくれた。母親がその代表だが、一人一人は写真のネガのように影の薄い家族の姿が終末に近づくにつれて急速に色つきのポジが変わって行くところが印象的だ。「事実」「感情」があるという点で、小説に似て小説ではなく紛れもなく筆者のエッセイである。

ハムダなおこ「祖母のはなし」。丁寧に書いているが、自分についても祖母についても「事実」の「説明」は多く

たい。残念だ。木村令胡「祖母の置き土産」。書き慣れている筆者だけに表現にくどさ（言わずもがな）があつておしい。邪馬知賢「地方国立大学の教育力・研究力を向上させるための穏健なる提案」。法人化が終了した国立・公立大学。その狙いは財政的措置ばかりではなかったはず。貴重かつ現実的な提言と読んだ。鈴木綾子「千変万化」。題材がいい。ならばたかし「泥棒市のヨガ行者」。小説的といえるかも知れないのは「描写」の周到さである。「市」の暑さ、乾燥した空気を感ずる。



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

「長生きすること」の幸福

三神 弘

最優秀賞のハムダなおこ「祖母のはなし」は、結婚して異国で暮らすひとりの女が、百歳で亡くなった祖母との間

ない。けれども、「私」が日本を発つた一七年前の電話、結婚して五年目の電話、その後の対面の機会……。 「私」と「祖母」のその折々の「感情」は遺憾なく汲み取ることが出来る。最後に「長生きをしてもいい」と思う「私」は「祖母」と一体化し、東北の田舎で静かに一生を送った「祖母」と一見波瀾万丈だった「私」に、女として変わりはないことを感じさせる。

松岡久仁子「音楽にすぐわれるもの」。冒頭の東日本の震災と慰問について、また、終末部の「人と人との間」にかかわる記述は、全体からやや遊離している。が、このエッセイの見所は、筆者自身、常に音楽によつて癒され、すぐわれている点である。であるからこそ、夫の病中、病後、アルバートの忙中、演奏を頼まれたモーツァルトのコンチェルトをさらうことに生き甲斐を感じる。人前で演奏する人のアイデンティティとはこういうところにあるのだろうか。となとまさに納得させてくれる。

むかいはつこ「アヒルが消えた日」。筆者は絵本に関わったりしているためだろうか、無意味な改行の多さは気になる。が、この作品の「描写」の迫力、微笑ましさは例外的に支持したい。

そのほか評者の印象に残った筆者・作品名、短評を挙げておく。

さいとうみち子「鉄塔」。もう少し見直しをきちんとし柄を振り返りつつ、生きること、生き続けることの意味を見出していく。それは、何かをなす、何かを得る、ということではなく、ただ在る、ということの尊さ、かけがえのないさ、といつてもよい。

女は十七年前、周りの誰をも説得できないまま国際結婚をし、ひとりで日本を発つたという。別れを告げたい相手は、何ごとも話していない祖母だけで、もう会えないかもしれないと、空港から電話をしたともいう。やがて、五年ほどがたった頃、日本の家族に会いたいという気持がつり、これより、祖母との再会が、また、限られたひとときが、輝き出していく。

読み進むうちに、読者には、百歳になるといふ祖母の姿が、身近で、親しく、懐かしいものになっていく。そして、いくつかのエピソードをとおして、身に備わっている処世のあり方も、さとされていく。日本の高齢化ということや、核家族、介護という用語も、連想されてくるはずだ。

さて、孫である女は、日本に帰るたび、これが最後になるのではという予感と、「後悔なく別れたい」という思いから、風呂で祖母の身体を流し、爪を切つてもやる。女には、すでに、子どももいるのだが、祖母の姿にふれるたびに、「無条件に愛し、愛されること」や、「長生きすること」の幸福を見出していく。さらには、異国での我が家族、自分自身の将来に照らして、信念ともいべきものを得てい

くのだが、この展開が、読みどころとなっている。
遠く離れた国で暮らしながら、なお、求めてやまないところに、女の切実さと、家族というものの本質をみることもできる。父母との関係は、はぶかれているが、祖母とのふれあいをとおして、あれこれと、想像することはできる。読者としては、国際結婚のいきさつや、異国における家族のあり方についても、関心をもつことだろう。

題名は、まことに素朴で、そして、東北の小さな町に住むという祖母もまた、じつに素朴だ。しかし、それゆえに、この祖母には、普通というものが、充足というものがある。最優秀賞の松岡久仁子「音楽にすくわれるもの」は、音楽を愛し、誇りとするがゆえに、「音楽によって救われた」とか「癒される」などという捉え方の風潮に、いささか辟易しているようだ。たとえば、大震災で悲嘆にくれている人々の前で「勇気づける音楽」など皮肉でしかないといひ、まずは瓦礫を撤去すべきだと、いささか声高だが、問題を喚起する。

こうしたことを前提として、作品は「私の身に起こった音楽体験」を語っていく。観念的、抽象的になりがちなテーマだが、やがて、音楽を聴いているかの、心地になっていく。つまり、固有なゆえのリアリティーがある。また、描かれていくところのありようは、ドラマにもなっていく。「夫は末期癌患者で、うちは貧しく、相変わらず生活の見えようようになっていく。

そこで挑戦することになったのが、漢字検定だということ。このことを夫に話すと、「頑張りや」と「笑った」というが、どういう笑いであったのか、読者は思いをめぐらせることになる。妻はというと、病室でも、勉強に励んだかいつて、見事合格する。妻は喜び、合格通知をもって、病院の廊下を歩くのだが、病室までが「不思議なくらい短く感じられた」という。小走りになる妻の姿が、気味悪いほどに、滑稽に、なまなましくなっていく。(到着順)

通しは立たない。私の心の中は、まるで震災後の、見渡す限りの瓦礫のような風景だ。毎日、炊き出しで疲弊しきっている。私はその瓦礫の中に、ひとり、パイプ椅子を出し、譜面台を立てて、音楽を奏でる」は、洗練されている。結末の「音楽を感じることはないのだ」は、いわゆる結論じみたものに陥ることなく、むしろ、作者が見出した境地、というものを垣間見せてくれる。

注目した作品のひとつ、田中濱子「空へ登る汽車」は、大切な記憶を、大切に書いたことで、秀作になっている。昭和三十年代の、まだ蒸気機関車が走っていた頃のこと、母を亡くした家族の話である。汽車が好きで妹にせがまれて描く絵が、見えてくる。鉄橋を渡るときに鳴らす汽笛が、聞こえてくる。「この汽車に乗って空へ行けば、お母さんに会える」と信じてやまない幼心が、せまってくる。

情緒過多で、古風な作どするむきもあるが、記憶をスケッチしていく筆遣いが、たどたどしいゆえに、読者に感情移入の余地を与え、共感を促していく。歳月を経ての結婚式の場も、過去と現在と、二つの時間を扱うことで、変わることはない母への思い、姉妹の情を伝えて、読者に伝えるものが多い。

奥畑信子「病院の廊下」は、夫の車椅子を押して歩く病院の廊下、つまり、目的地ではない、いわば「橋懸かり」という設定に着目した。そして、末期癌の夫と、一方、看

すばる文学賞受賞

三日芝居

三神弘

集英社



2012.7.30 選考会風景

祖母のはなし

ハムダなおこ

UAE

百歳になる祖母が亡くなりました。腹部にあった動脈瘤が破裂せず、雪が降りだした寒い朝に眠りの続きのまま亡くなったのは幸いでした。

祖母のことを考えるとき、いつも思い出すのは成田空港からかけた電話です。

十七年前、アラブ首長国連邦(UAE)の男性と結婚するため日本を発つ朝のこと、周りの誰をも説得できなかった私は、結局ひとりで旅発つことになりました。

見送りにきてくれた親友と空気を奮って別れたあと、出発ゲートまでの長い道のりを自分を奮い立たせながら歩きました。胸には不安が巨大な渦を巻いて、私を飲み込

女性への抑圧、未開の産油地という先入観だけで話を進める人たちに、私は何十回も何百回も同じ説明を繰り返し、疲れ果て、最後に「もう誰にも話さない」と決めたのです。それは、話すことで説得できる余地はもうほとんどなく、話す分だけエネルギーが不毛に消耗するからでした。

わずかな荷物を輸送して、一緒に住んでいた友達に別れを告げ、カバン一つで空港に立った時、私に残った道は前に進むことだけでした。

出国手続きを終えて、搭乗ゲートで最後の公衆電話の前に立つと、私にとって別れを告げたい相手は祖母しかいませんでした。どう言おう、何を言おうと考えている間に、平素と変わらぬ声で電話に出た祖母に、

「おばあちゃん、あのね、これから……」

その途端、端折^{はしよ}ってきたすべての説明が喉元にこみ上げ、言葉が詰まりました。当時八十歳を越えた祖母には、結婚することも異国に行くことも説明したことはなかった。もう会えないかも、という思いがよぎると、それに押しつぶされる前に、私は明るい声を絞りました。「これからちよっと遠くへ行くんだ。しばらくは帰れないけど、元気でね」

そして「身体だけは気をつけて」と繰り返す祖母を振り切るように受話器を置き、飛行機に乗ったのでした。

うとしています。自分の選択は正しいと固く信じながらも、この結婚が実りあるものになるのか、多くの困難を乗り越え幸福な未来を築くことができるのか、愛情は長い道のりに磨耗せず続くのか、そんなことは世界中の誰一人保証してくれるはずもなく、それでも正しいと信じる方に自分の全人生を懸けるしかなかった。

あの当時、アラブといえば遥かな異人の国でした。

米国で学位を取得しUAEの労働省で働き始めたばかりの夫と、日本で通訳をしていた私は、一九九〇年に日本政府の主催する国際交流の船上プログラムで出会いました。国の代表として乗船した、いわば選ばれた人材である夫の人となり説明する前に、アラブ人、イスラム教、四人妻、

UAEでの生活は、毎日が未知なるものとの出会いでした。衣食住から始まって、文化習慣、宗教戒律、家族生活、すべてにおいて私が慣れ親しんできた日本や欧米の生活とは違います。時間の流れ、空間の測り方、人間関係の結びつきなどが皆目わかりません、しかしわかるように性急な努力もせずに、私は毎日を過ごしました。産業エンジニアである夫は、当時労働省で工場の安全基準を測る監査役として働いていました。産業エンジニアとは、ある産業がどのくらいの規模の街でどういったスケールで設立・経営可能かを研究する学問で、紙面での計算にとどまらず、工場のレイアウトや導入する機械の種類までを特定する広範囲な知識を必要とします。一九七一年に小さな首長国が集まって連邦国となったばかりのUAEで、自国の産業を育てよう夫は夢と希望に燃えていました。結婚してすぐ、労働省で働きながら長年の夢であったプラスチック工場を設立し、眠る時間さえ削って働いています。私は私で年を置かず子供に恵まれ、目が回るほど忙しい日々でした。

結婚して五年ほどたった頃、日本の家族に会いたい気持ち募り、よく夢を見ました。しかし日本に行っても親が自分たちを受け入れるか、子どもたちを可愛がってくれるかと心配ばかり押し寄せます。

そのうち夢で人に会ったり連れだつて歩くようになり、朝起きるとちぐはぐな格好で靴を履いて寝ていることがあ

りました。夫は穴のあくまで私の顔を見つめ、「きみには休暇が必要だ。今年はずい日本にいこう」と言いました。

しかし行くと決めたら決めただけで不安は募ります。

ある日たまたまなくなって、朝の六時に祖母に電話をかけました。寒い朝で毛布を肩にかけたまま電話に出たという祖母は、突然かかってきた孫娘の不安を聞き終えると、余計なことをいろいろ言わずに、

「好きで一緒になつたんだから」

と私に対してか親にかわからない表現をしました。

「怒っているつたつて、会うのは会うだろ。来てしまったらもう帰れとは言わないべ」

帰れとは言わないという言葉に頼りに、私は日本に行く気持ちになりました。

結婚六年目に初めて日本に帰ったとき、祖母はすでに九十歳になろうとしていました。

八月の暑い日、東京から新幹線と東北本線乗り継いで祖母の住む最上もがみの小さな駅に着きました。遠くに見える家並みのひとつに、二階の窓から首を伸ばして私を探す祖母を見た時、私は思わず泣きながら駆け出していました。成田空港から電話をかけたあの日、祖母と再び会える確証はなかった。これは神の与えてくれた僥倖きようこうだと思つたと、祖母

言うのを忘れませんでした。

今年の夏日本に行つたとき、祖母は入院していました。

住み慣れた家から叔父の家に移り、廊下で滑つて骨折したのです。いろいろな思いは胸にあるけれど、祖母が病院に移つたのはしたがっていいことだと私は考えました。次々と人が出入りし、機嫌よく挨拶し、刺激を与えるからです。しかし国際電話をする機会は失われてしまいました。

滞在した四日間、朝夕私は祖母を訪ね、もう出来ることは少ない中で、髪を梳かし、ご飯を食べさせ、入れ歯を洗いました。

入院していながらも祖母の頭ははつきりしており、病室に人が来るたびに「外国からわざわざ来てくれた孫娘」と私を紹介しました。お土産に持つていったカシミアのショールをはおり、車椅子で外に出てみたりもしました。ずっと昔にアラブから贈つた金の指輪を失くしたことを何度も悔いるので、私は自分の指から指輪を抜いてあげました。

すると祖母は指にはめて嬉しそうに、

「あらら、びつたりだ。本当にうまく指に入った。じゃ、もらつておく」と笑いました。

百歳になつてもオシヤレをする祖母の心が嬉しい以上に、それを躊躇なくもらう行為が私を喜ばせました。「病

は私に会うために生きながらえていたとしか思えませんでした。

夫と子どもたちを祖母は暖かく迎えてくれました。祖母が知る外国はアメリカと中国くらいでしょうか。二十世紀の百年を生きたうち一番遠くに行つたのは九州だと自慢していましたから、アラブなど知りようがありません。けれど、

「ええ旦那さんだね、あんたを遠い外国から、ちゃんとあたしに会いに寄こすんだから」と評価してくれました。祖母にとって「ええ旦那」とは、どの国のどの宗教の間かよりも、私が健康で幸せに暮らし、自由に子どもを育て、時々日本に戻る生活を保証する旦那、という本質的な問題だけなのでした。

私はそれから日本に帰るたびに、祖母を訪ねました。

祖母の部屋を上から下まで掃除し、雑巾がけし、布団を干し、シーツやカバーを洗い、風呂で身体を流し、爪を切つた。それは祖母に尽くしたい以上に、「決して後悔なく別れたい」という自分自身のためだったかもしれません。祖母は祖母で、娘である母にも嫁である叔母にも見せない甘えを享受していました。そして何を言うでもなく「はい、ありがとさん」とニコニコしていました。また別れ際には必ず、「だあれも知らない所へ行つたんだから、子どもをたくさん産んで、そこに自分の居場所をつくるんだよ」と

院だから何も必要ない」、「失くすと困るからいらぬ」と言われたら、きつとガツカリしたでしょう。祖母がただ嬉しそうに受けとること、私は満足し幸福になりました。つまり祖母の存在とはそういうものだと、その時私は気付いたのです。

無条件に誰かを愛し、無条件に愛され、甘える――。

私や従妹が子どもの頃、祖母は無条件に私たちを愛してくれました。成長するにつれ、わがままや失敗を繰り返して痛い目に遭つた私たちを、やはり無条件で受け入れてくれました。そして今、ようやく自力で歩き出した私たちに甘えています。人に甘えることは自分の気持ちを譲らなければ出来ません。つまり祖母は私や従妹に応える形で、甘えることを自分に許してきた。これは孫娘と祖母だから成り立つ不思議な関係かもしれませぬ。

私は結婚してからずっと、異国で長生きする必要はないと考えていました。身体が思うように動かなくなつたら、多くの友人も幼なじみもないし、言葉の通じない嫁や価値観のちがう婿と一緒に生活するより、さつさと逝つた方が楽だと考えていました。決して人生を悲観しているのではなく、その方が煩わしさの少ない人生になるだろうと漠然と考えていたのでした。

ところが祖母の生き様を見て、少し違う考えが浮かびま

した。祖母は物理的にも金銭的にも行動上も何をしたわけでもないのに、長生きすることで孫娘に多くの幸福をもたらしてくれました。

自分の娘なら納得できないことは誰にもあります。私も娘が成長するにつれ「この程度の選択は本人に任せる」つもりだったことが、許せずにはいたります。さつと祖母も、母に対して同じ気持ちをつつて抱いたでしょう。簡単に許さなかったこと、言わなかったこと、頼まなかったことは数多くあるはずで。

でも孫ならちがう。成人した孫に身体を洗われ、家中を掃除してもらい、指にはめた金の指輪をもらうのは、そう難しいことではありません。さらに孫の選択を許し、条件をつけずただ見守り、他と比較せず評価するのは、世代を超えているからこそできることなのかもしれません。

長生きして孫娘のさまざまな悩みを聞いてやるのが祖母に与えられた特権だとしたら、私は長生きしていい、と思います。最近ことごとく対立する子どもたちがいつか産むであろう未来の孫娘たちに、無条件の愛情を注ぐために、異国で長生きする意味はあるのかもしれない。未来の孫娘が「親は何もわかってくれない」と泣きついてくるとき、まずありったけの話を聞いて、孫娘にとって何が本当に大切なかを理解する祖母となるのも悪くない——と。

受賞の言葉

ハムダなおこ

三年ぶりに日本に来て、日本の大学に留学している長男の世話をしていたところに、受賞の連絡をいただきました。ちょうどラマダーン（世界中のムスリムが断食をする月）の断食明けの食事を用意している最中で、中国に語学留学している長女と、UAEに置いてきた息子ふたりと、日本と一緒に連れてきた次女の、それぞれの今日の食事のことばかり考えていました。

電話から、ひと呼吸おいて遠くに聞こえる声で「受賞」と耳に入ったのですが、どんな賞をいただいたのか、はるかに遠いと感じるのは、耳のせいなのか、めまぐるしく展開してきた子どもたちの夏のせいなのか、料理に全神経を集中しているせいなのか、それともラマダーンの空腹のせいなのか——いずれにせよ、箸を置いて、日本の携帯番号にかけ直していただいた電話を待ちました。

四月はすでに灼熱の気候となっているUAEで、両替屋をまわり小さなドル札を買い求め、郵便局から国際書留を送った記憶が蘇ります。日本の文芸界でこのようなエッセイが通用するのか、いやそれより二〇年も経た外国暮らしの感覚が、日本人の花鳥風月を愛でる感性に訴えられるのか。ちらりと考えながら、しかし祖母を送ったこのエッセ

東北の山奥の村落で一生を送った祖母に教えられたことはいくつもあります。

文句を言わず潔く生きること、仕方のないことは手離して忘れること、いつまでもよくよく考えないこと。

そう、祖母は潔い女性だった。そして私にとってはおかけがえのない存在でした。

今、祖母のいない空白を埋められるものは、自分がそのような祖母になるという想像だけかもしれません。長生きして、自分とは随分顔の違う、何語をしゃべるか想像もできない孫娘が、胸をいっばいに詰まらせて私に悩みを相談しにくる——そんな未来を想定して、無条件の愛情を次の出番まで大事にしまいながら、いまは祖母の旅立ちを見送ろうと思います。



UAE

ハムダなおこ

- 東京都出身 日本UAE文化センター代表 エッセイスト
- 1990 総務庁主催「世界青年の船」に通訳として乗船し、アラブ首長国連邦UAE代表青年だった夫と出会う
- 1年後に結婚しUAEに移住
- 産業エンジニアである夫と5人の子どもの育てながら、アラブ・イスラームの日常生活についてのエッセイを書き続ける
- 学校行事、大学での日本語教師、講演会などを通して、地域の文化活動に参加
- 2008 日本UAE文化センターを創設
- 日本文化をUAEの地域社会に、UAE文化を邦人社会に伝える、さまざまな交流活動を主宰
- 2012 年末に初のエッセイ集『アラブからこんにちは』（仮題/国書刊行会）を出版する予定

イは書かずにはいられなかったのだと納得して、運転し帰ったことも思い起こされます。

すべては神の思うように動く——。世界中のムスリムが信じている「神の意志」によるひとりひとりに与えられた運命が、これから私に何をせよと伝えているのか。今度はいつかりと近い声で最優秀賞受賞を告げる電話を受けながら、心をときめかせて考えております。

つらら
氷柱の涙

岬健太郎

あれだけ私達の行く手を阻んだ瓦礫の山は粉雪とともに遠くの山手に霞んで見えた。

世界中を震撼させた3・11東日本大震災。その発生翌日から他県の警察官として宮城県や岩手県に幾度も派遣された私は、関西の自宅から車を飛ばし、今回は石巻市を再訪していた。休暇を取ってまで一人駆けつけた師走の東北は雪が舞い、私達のご遺体の搜索と収容の任務に明け暮れた頃とは違う、さらに厳しい寒気が私の肌を包んだ。そしてあの地獄の惨状の中、私達がパール一本だけを手にして格闘した瓦礫の山は、東北のどこに行っても遥か遠い山の上の方に片付けられており、それが確かに少しづつ被災地が復興している槌音として感じる事ができた。

時には、私達が車まで棺を運んだ。身元不明で損傷の激しいご遺体がドライアイスでの保存が効かなくなれば、それは本来なら行政の業務であったが、私達が指定の場所に穴を掘り、仮埋葬して番号だけの墓標を建てるなど、日頃の死体扱いの業務で多少はご遺体の取扱いは慣れているはずの私達でさえ、初めて経験する任務だった。

最初の東北派遣が終わり、元の職場に戻った時、任務の内容を聞いた同僚達は「そんなことまで！ 何でそこまで！」と驚き、上層部の中には「感染症の問題があるだろう。そこまで考えたのか！」と怒鳴る者もいた。

連日、安置所で号泣される遺族の悲鳴を耳にし、津波で家族を亡くされても住民のためにと歯を食いしばって業務に奮闘する行政職員の姿を見てきた私達だった。あの悲惨で悲しみの極地に居合わせなかった者には、あの状況がわからない。テレビの映像しか見ていないお前達に、あの悲しみは決して伝わらない、伝わるものか、と私は強く思った。

逆に被災地では、そんな時、遺族の方達は私達に向かって、「お世話様です」という言葉を投げかけてくれた。東北弁独特の発音で哀切さすら漂うこの言葉は、東北派遣中の至る所で耳にした。だがこの言葉を聞くたびに、私の胸は締めつけられるような感覚に支配されたのだ。

きつと初めに決意した、「必ず被災者を助け出すぞ！」

最初の派遣の出発前、「一人でも多く被災者を助け出す！」と堅く心に誓い、現地入りした私達の前に立ち塞がったのが、行く手を阻み続ける怪物のような瓦礫だった。そしてその瓦礫の下には何十、何百もの老若男女のご遺体が伏されていた。激しい余震が続く中、そのご遺体を海岸や家屋の中で発見しては、安置所となった小学校の体育館に運び込む毎日だった。死因を特定する検死作業が終わるのを待って、白い棺に納め、線香と菊の花を手向けて合掌する日々が続いた。さらに悲しい事実であるが、これらのご遺体の数以上に多くの遺族が遺された。

現地ではあまりのご遺体の多さに葬儀業者の手が回らずご遺体引き取りの遺族が高齢者の場合でご遺体を運べないという意気込みが、現実の厳しさの前で挫折して諦観にも似た感情に移っていったからだろう。そして結果としては一人の生存者をも救出できず、大津波や大地震で犠牲になられた方の遺族に対して、何もできなかった。果たして私達は「お世話様です」と言われる立場にあったのだろうか、という忸怩たる想いが、私の中にいつまでも残った。

だから派遣に一区切りがついて元の職場に戻ってみても、あの現場は一体どうなっているのだろう、あの時に言葉を交わした人達は どうしているだろう、という居ても立ってもいられない焦燥感に駆られ、私はもう一度、派遣された地で最も印象深かった石巻まで、車を飛ばしてやってきたのだった。

そしてまだ荒涼たる港町を見つめてみると、やはり私の脳裡にはあの出来事が蘇ってきた。

あれは何体目に搬送したご遺体だっただろう。長い髪をした若い女性のご遺体だった。

津波に襲われたその女性は衣服のポケットに入っていた診察券から身元が判明し、遺族であるご主人と幼稚園児の娘さんが安置所で対面された。私は棺を開けてあげた。ご主人はご遺体を見つめて号泣した。私にはご主人の横でただ寄り添い、佇むことしかできなかった。

そしてパパの傍らで棺の中に横たわるママの顔を不思議

そうに覗き込むお嬢ちゃんは、何度も何度も囁いた。
「ママ。ママ。起きて。起きて。早く、おうち、帰ろう。
早く、おうち、帰ろう」

確かにママは今すぐに起き上がるのではないかというほどきれいな顔をして眠っていた。

「すみません。すみません」

と嗚咽されるご主人を気遣いながら、事務的にならないように、誠実に、と自分に言い聞かせながら、少しだけ落ち着きを取り戻されたご主人に埋葬の手続きなどを説明していくと、ご遺体を明日、迎えに来られるということになった。

私にとって永遠ではないかという長い長いご遺体への確認の付き添いが終わり、安置所の出口まで見送った時だった。私に向かって頭を下げ、お世話様です、と口にされたパパと繋いでいた手を離し、お嬢ちゃんは「気をつけ」の姿勢となった。そして私に向かって、「おまわりさん。お世話様です。ママは明日、迎えに来ます」

そう言っ、ペコリとお辞儀をしたのだ。

一瞬、お嬢ちゃんの顔が自分の娘の顔と重なった。初めて東北の派遣に出発する日の朝、「お父さん！ 東北の人を助けてあげてっ！」と言っ、両手を振りながら見送ってくれた小学生の娘の顔……。

突然、グッとこみあがってきた涙をようやく抑え、私は

復唱するように私の目から涙が落ちた。あの子とパパは今頃どうしているだろう。どんな新年を迎えるのだろう。

3・11が発生した直後、日本の人々は早くから「被災地への思いやり」だと声高々に叫んでいた。哀しみの中で秩序よく行動した被災者を讃え、「絆」という言葉も生み出した。

しかし、現在では被災地で大量発生した瓦礫を他の自治体はほとんど受け入れを拒否するか断念してしまっている。「絆」はどこへ行ってしまったのだろう。あの悲劇から一年も経っていないのに、放射能汚染の過大な風評被害のほが勝っているのだ。

だが、少なくとも被災地で悲しすぎる幾多の事実を目にした者には、あの3・11が残した意味を語り継ぐ義務がある。そしてそれをたんなる哀切さに留めることなく、被災地で見つけた人の優しさや自らの体験を周囲に伝えることが、後世に続く支援の糧^{たすけ}となっていくのだと私は思う。

「戦後」の次の「災後」という言葉まで生まれた東日本大震災。その未曾有の国難に際して、現地で多くの犠牲者を問近で見、野辺の送りに寄り添った。自らも涙を流しつつ、その夜、私には水柱の水滴が犠牲者とその遺族の涙に見えた。

お嬢ちゃんの前にしゃがみ込み、同じ目線になって頭を撫でてあげた。そうしなければ、きっと私は堪えられなかつただろう。

「きちんとご挨拶できたね。えらいね。こちらこそ。お世話様です」

泣き笑いの顔だったけれど、なんとか言うことができた。お嬢ちゃんはいれしような顔をして私に向かってバイバイをし、何度も振り返っては頭を下げられるパパと一緒に帰っていった。

石巻市を再訪したその日、私はかつてご遺体の搜索や収容の激務に明け暮れた海岸線や仮設住宅を見て回り、苦労を共にした行政職員との再会を果たしたりした。そして夜は石巻から程近い小さな宿に泊まることにした。年老いた女将さんから宿帳を差し出されて世間話をした時も、「派遣で来られましたか。わざわざ遠くから。お世話様です」と言われた。

夜中、厳しい寒気のために目が覚めた。障子を開けると屋根から下がる水柱が見える。

窓の軒先にある暖房の室外機の暖気が水柱にあたり、そのために室外機から一番近い水柱の先からポトリ、ポトリと水滴が垂れていたのだ。

煙草に火をつけ、その水滴を見ていると、水柱の水滴と



2011.3.11の津波による石巻の災害地

受賞の言葉

岬健太郎

このたび、栄えある文芸思潮エッセイ賞の最優秀賞に選出していただき、まことに光栄至極である。

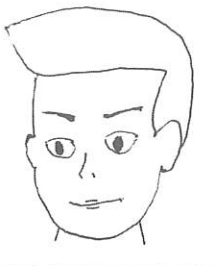
四五〇篇もの作品の中から拙作「氷柱の涙」が最優秀賞に選ばれたとお聞きしたとき、嬉しさよりもまず驚きの方を強く感じた。文芸思潮エッセイ賞はその応募数もさることながら、レベルの高い作品が多く集まると聞いていたからである。

この作品は3・11東日本大震災に際して、自らが体験し、考えたことをストレートに原稿用紙へぶつけたものであるが、作品中には多くの体験の中でもほんの一部の事実やエピソードだけを紹介した。

あの激しい余震が続く中、大津波にかけがえのない家族を亡くし、地震や津波で家をなくし、絶望と悲嘆の中に身を置きながらも、決して人としてのやさしさを失わなかった事実を伝えたい。その一心で書き上げた。

私には師もなく、特に文章の勉強もせず、全くの我流であるために、私の作品は表現方法など稚拙な文章だと自覚はしているが、それでも今回の受賞でひとつだけわかったことがある。

それはエッセイを書くとき、自分の感情を優先させすぎてはいけない、ということだ。



岬 健太郎

みさき	けんたろう
1963	大阪府生まれ
85	大阪商業大学 商経学部卒
2011	第4回ノースアジア大学文学賞 一般エッセイ部門最優秀賞受賞
	第9回下田歌子賞 一般エッセイ部門 優秀賞
12	第6回広告エッセイ大賞 大賞受賞

あえて言えば、主題の人々にまつわる事実を積み重ねて構成し、ほんの少しの批判と、今回の場合は氷柱というものに心を投影して仕上げたように「頭で書くのではなく、心で書く」のだ。この人たちのためならば自分の主張などどうでもよいとさえ思える、拙くても自己犠牲が勝る文章。そんな文章もあったのだ。そのことがわかったのは、私にとっても貴重な体験だった。

今回の受賞が、あの震災で犠牲になられた方々へのせめてもの手向けになればと信じ、今後も人の心を打つエッセイを手がけていきたい。

第80回
文芸思潮
エッセイ賞
最優秀賞

音楽にすぐわれるもの

Essay

松岡久仁子

「音楽によって救われた」と人はよく言うけれど、それはどうということなのだろうと、ずっと不思議に思っていた。わたしは音楽を生業にしているが、音楽は、それで救われるというより、もっと危険で、刺激的な友人のようなものだ。「癒される」というが、そんな温泉のような効能を音楽に求めたことはない。音の原因を芯まで聴きこんでいく習性が、どんな音楽とも、肌触れ合い穏やかに許し合うような関係を許さなかった。

阪神大震災の直後、あるオーケストラが、現地の人々を慰問演奏に行つて、響響を買ったという噂を聞いて、さもありなんと思つた。家が壊され、財産を失くし、愛する人々と別れ別れになつて、茫然と立ち尽くす人々の傍で、

音楽に何ができるだろう？ 食べることに、住むことに、治療すること、その方法が見つからず悲嘆にくれる人々の前で、「勇気づける音楽」なんて、皮肉でしかない。まずは瓦礫を撤去し、衛生用品と温かい食べ物を届けるための手足になることだろう。そこにパイプ椅子と譜面台を出して、一体どんな曲を演奏できるのだろうか？

阪神大震災の時もそうだったが、東日本大震災の時には集金目的である。お金を出して聴きに来る人たちも、善行を讃えるための音楽を聞いて、満足感が倍になる。音楽家も、音楽を奏することで善行を積み、集客や売名、そして経費の削減に役に立つので、やはり満足感が倍にな

る。被災地にはお金が入る。三者ともに実利があるのだ。

ところがこれが、「被災者を慰める」とか「慰霊コンサート」とかになってくると、わけがわからなくなる。被災者が東京の会場まで聴きにやってくるとは思えないから、この音楽を、時空を超えて「思い」と共に被災地に届ける、という抽象的なメッセージなのか、それとも、たとえば東京などの「非被災地」に住む、共感性の高い人々の、震災によって傷ついた心を慰めるためのものなのか、あるいは、「震災被害」の風化を防ぐための、自主的な広報活動なのかもしれない。いずれにしても、どういうわけか、そこで演奏される音楽はやはり癒され、肌触れ合い穏やかに許し合うような「温泉風」のものが多く、腫れものに触るようにやわらかく空間に溶けだして、何も残らない。これが、被災地の、生きている魂にも、亡くなられた魂にも、そして傷ついた魂にも、届くとは、到底思えない。

時折、震災には限らないのだが、事象にショックを受けて傷ついた演奏家が、自分の魂を雑巾のごとく絞り切るような演奏を行うことがある。会場でスピーチをすることもある。これはこれで、聴く側、観る側にショックを与えるので、かなり堪える。感情の重さを共有するためには、そこに到るだけの必然的な過程が必要だと言うことが、よくわかる。つまり、心の準備が要るのだ。

のだが、「マクロファージ」という免疫細胞の登場に呼応して「スターウォーズ」のようなファンファーレが鳴り響く。書物の中の免疫の戦いは、わたしの頭の中では音楽に転換してしまう。

夫の病状に一喜一憂を繰り返す中、ふと、とことん絶望的な気持ちになることがある。もし、夫が死んでしまったら、わたしなど生きる価値もないとまで思い詰めた時、ナチスの収容所の中で生き延びたフランクルの哲学と、メシアンを思いついた。どんな状況にも意味がある。どんな状況にも音楽はある。そのことが価値なのだ、自分に何度も繰り返し、言い聞かせた。

無事夫が退院して、自宅で療養することになってからも、やはりわたしは、家事と、夫の世話と、仕事に追われて、演奏は一切できなかった。でも、頭の中で鳴っていた音楽をあらためて聴き直し、それ以外にも、メシアンの「世の終わりのための四重奏曲」やブラームスの弦楽四重奏、モーツァルトのピアノコンチェルトなどをよく聴いた。聴きながら家事を行った。時間の流れが音楽に満ちることで、やっと空間の中に、一輪挿しの花のように支えられて立っていられるような気がした。

夫が退院して一年経つと、わたしは、かつての1/3の仕事量になってしまった夫の代わりに、少しでも収入を増やすために、アルバイトを始めた。ますます演奏からは遠

日ごろそんなことを考えていたわたしだったが、昨年、夫の大腸癌が発覚したとき、わたしの身に起こった個人的な音楽体験は興味深いものだった。

夫は肝臓に六箇所転移した末期癌で、S状結腸と肝臓を同時切除する大手術を行い、一か月近く入院する。わたしは、仕事をし、病院に通って夫に付き添い、帰宅して夕食を作り、息子と食べて、夫の両親や兄弟に報告の電話やメールをする。その後、アイロンかけや洗濯物畳みなどの家事を行い、くたくたになって眠る。頭の中はキーンという高周波音の耳鳴りがし、首はパンパンに張っている。音楽などこれっぽっちも入る余地がない、演奏もできないし、聴く余裕もない毎日だった。

ところが大事な場面で、頭の中で自動的に音楽が鳴り響くのだ。

朝、憂鬱な疲れ切った身体を、無理やり叩き起こすと、頭の中にモーツァルトの「レクイエム」の「ラクリモサ」が流れる。おそらく、ウインフィルとカール・ベームの演奏だ。深い悲しみに満ちた弦楽器のヴィヴァーロに身体は動かされる。また、寝る前に自分が本当に夫を失うかもしれないと孤独を感じた時、ブラームスのピアノ五重奏曲が鳴り響く。音楽が涙の代わりになるので、泣かないでいられる。

夫の退院が近くなると、免疫について書かれた本を読む

ざかる。一年もピアノに触らなかつたら、もう指は腐っているも同然だ。ところがそんなわたしのところに、アマチュアのオーケストラから、なんとモーツァルトのコンチェルトの演奏のオフアアが来る。さんざん迷ったが、「一年後のことはわからないけれど、少なくとも半年後なら夫はまだ生きていだろう」と思い、夫に、大好きなモーツァルトのコンチェルトを聴いてもらえる、こんな機会は今二度とないと、思い切って引き受けることにした。時給九〇〇円のアルバイトを六時間終えて、くたくたになって帰宅し、さらに家に来る生徒さんのレッスンをやる。そして夕食を作り、食べると、もう動けないというくらい疲れが出てくる。でも練習しないわけにはいかないのだから、収容所にいたフランクルやメシアンのことを思い出しながら、熱いブラックコーヒーを飲んで、夜中の十二時にピアノに向かい、モーツァルトの二十一番のコンチェルトの譜読みをする。それは「苦業」だっただろうか？ いいや、とんでもない。信じがたいことだが、それは「喜び」だったのだ。

その時、わたしは音楽の中に飛ぶ。なんと明るく輝いた世界なのだろう。わたしは理解する。もし天国があるとしたら、音楽の中にある。音と音の間にあるに違いないと。アルバイトの疲れも、生活の不安も、病気も、すべて消えて、そこに残っているのは、温かく流れる命の、美しい輝

きだけだった。

そんな毎日を繰り返して、やがて本番を迎え、コンチエルトは無事に演奏することができた。

コンチエルトが終わると、今度は、うんざりする「現実」だけが残った。今までは、アルバイト先で上司にぶたれても、理不尽な扱いをされても、「わたしはコンチエルトを弾くのだから」と思うことができた。モーツァルトの音楽に魂を寄り添わせて、あの、静寂と輝きに満ちた世界の、音楽の泉の水に口を付ける。そうすると、どんな現実だって耐えられるのだ。

昨日と今日と明日では、状況はそれほど変わらない。夫は末期癌患者でうちは貧しく、相変わらず生活の見通しは立たない。わたしの心の中は、まるで震災後の、見渡す限りの瓦礫のような風景だ。毎日、炊き出しで疲弊しきっている。

わたしはその瓦礫の中に、ひとり、パイプ椅子を出し、譜面台を立てて、音楽を奏でる。明日を生きるために、音楽を奏でる。

ある日には、まったく絶望的になるけれど、ある日には、なんとかなる、と思える、そんな日々の繰り返しの中で、「こうキツかったら、音楽でもしなくちゃ、やっつられないぜ……」と呟きながら、ピアノに向かう。音と音の間に向かう。ある音から次の音への移行、その過程こそが

受賞の言葉

松岡久仁子

文章を書き始めて応募するようになったのは今年からです。子どものころから文章を書くのも読むのも大好きで、少しの苦もなかったのですが、父が若い頃小説家志望で大変文章が巧く、主人も息子も文学専攻で、私は文学の才能がないと言われ続けていたために、他人様にお見せしようという気は起こりませんでした。父には、音楽教育に関する卒業論文を読んでもらいましたが、一分間の沈黙の後、「風姿花伝」を読むように言われただけでした。主人には、面白そうだからフーコーの本を読んでみようかな、と言ったら、一〇秒の沈黙の後、「クジラが空を飛ばうとするようなものだ」と言われたくらいです。このように家族の中では文学的ヒエラルキー最下層の私でした。

そんな私がエッセイを書き始めたきっかけは、パリ在住のピアニスト、志村正子さんのお陰です。生活のために時給九〇〇円のアルバイトを始めた話をしたら、「もつとあなたの才能を生かしたらどうなの。文章とかイラストとか。久仁ちゃんには絶対才能がある、私が保証する」と強く言われたのです。

自分の才能は信じられませんでした。友人の言葉を信じて、書き始めてみると、意外にも心の中に、様々な言語化されていない思いが、澱のように溜まってい

「意味」を持つ。そこに解釈が入り、気持ちが入る。

おそらく、人も同じに違いない。「人と人の間」が大切なのだ。言葉や、物や、形となる、その一歩手前の空間に、意味を込めること。一日一日の、なんでもない時間の、空気の中に、音楽を感じることなのだ。とにかく夫はまだ生きています。そしてわたしもまた、生きています。



松岡久仁子

まつおか くにこ

東京生まれ
武蔵野音楽大学大学院修了

その後演奏活動とピアノの個人レッスンを生業とし今日に至る

ることを知り、自分でも驚きました。

拙い文章に賞を頂き、本当に有り難く光栄に思います。そしてこのきっかけを与えてくれた志村さんに感謝します。今は亡き父はこの受賞を喜んでくれた志村さんでしょうか。父の一分間の沈黙と、主人の一〇秒の沈黙にも感謝したいと思います。それが私に考える時間を与えてくれました。私の文章を読んで下さったすべての方々にも感謝いたします。ありがとうございます。

文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙7

THE ESSAY COSMOS

第8回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第8回エッセイ賞の輝く作品を集めた豊かなエッセイ集
エッセイ宇宙が豊かに広がります。さまざまな生きる声
が聞こえる命のエッセイ集。

2013.1 月下旬発売

アジア文化社

1000円+税

ご注文はアジア文化社まで

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

泥棒市のヨガ行者

ならはたかし

旧弊ルビーが通じていた時分、『インドの神秘を訪ねて』というツアーに乗った。その折ボンベイにとったホテルの階上を朝食に降りるたび、玄関先に屯するリクシャーを窓越しに見下ろしていた。ローカルの飛行機、バスによるガイド付きスケジュールも至極けっこうだったが、僕は一度アバンチュールを兼ねてそのプリミティブなタクシーに乗ってみたいと思っていた。

それで予定のプログラムを一日抜けて『泥棒市はいかがです』と車夫のひとりに呼びかけられるまま、幌にとびのつた。昇ったばかりの乾季の陽がすがすがしく照り輝いている凸凹道を三、四十分ほど揺られて着いた所はバゴダの跡か、それらしいかなりの数の礎石が見当るだっ広い空き地に朝市が立ち、賑わっていた。

廃墟を利用したバラック、シート、茅でかこつた屋台、

きざまれ、痩せ細った身体は凝結した筋肉の束となつて、ジャコメッティの彫刻を逆立てたつていうさまだ。いま片手倒立体になつたところ、赤銅色にくすんだ一本の銅線がバックに聳えたつ白亜の建物をみごと刺し貫いている。それがいつか前に屈み、股間、腕の間、腋下、腹溝に深く空間を抱きこみつつ展開しはじめているのだ。筋肉の波のうねりとともに手足が差しつ、抜かれつ、身体の表裏の見分けがつかないまでもつれていく。それもスローモーションを見る動き、じりじり見る者のハートを締め上げ丹田に力を入れさせる。一呼吸のこして縛れを解きにかかる、手足を抜きもどし、身体をふたたび〈く〉の字なりに折りこみ、屈みまるまり尻をずり下げていく。

肌を汗にぬめらせながら座位にもどつたとき、観衆からコインが投げられバラバラ地をたたいた。——と、行者はやにわに地を蹴った。蠅とたかる子供たちを押しつけコインをかき集め、掌をひろげて値踏みをはじめた。やつぱりねえ……、鼻白んで観衆の波が潮の引くように弛みかかる。そこへ「おい見ろ!」、誰かが連れを呼び止める声が出た。「あッ、呑んじゃつた!」「なにを?」「コインをよ!」え!「ふん、あいつ腹を財布にしているんだ。最も安全な場所だからな……」その呟きを「ルビー三枚!」という鋭い声で切った。同時に腸をよじられる異様な呻きがほとばしり、グエ! 三枚のルビー・コインがチャリーン! と行者の

露店があり、車、荷車、リヤカーで品物を運んで店開きをする商人もあつたが、大方は子供を抱きかかえ、手を引き、商品を頭にのせ、小脇にかかえてきて、じかに地べたに置くか、ぼろ布を敷いて並べていた。

しばらく野次馬気分で見てまわっているうち、テントにまず見られるアンチックの店を見つけ、盗品らしい人差し指と親指を輪にしている阿弥陀印相のブロンズの右掌を、言い値の一桁落として買い、店を出たところで、僕は黒山の人だかりに背伸びした。中にいきなりニューツと、白い足裏を見せて墨掻き棒のような黒い二本の脚が突き出てくる。ツーリスト相手の大道芸人の類か……と通り過ぎようとして、足が地に吸いつけられた。

六十がらみ、薄い髪を後ろにチョンと束ね、洗いざらした腰布ひとつ。白髭にかこまれた彫りの深い顔は皺にきり

掌に吐き出された。

何が起きたんだ、何が? 観衆の背がくるり色返る。ぞろぞろまた元の輪に舞いもどり指令の主を呑みこみ、それが行者の鼻面にむかつて縮んでいく。

「五十パイサ!」の指示に、ポロリ一枚……。「五十パイサ・コインじゃない、十パイサ五枚だよ、五つ!」の野次の跳ね返りに、それを口に放りこみ、追っつけ五枚の十パイサ・コインに吐き戻して応える。

「ほう!」突き刺してくる陽を返す行者の白い掌に人々の視線がいつせいに集まる。パチパチ拍手が鳴る。ふたたび行者は手にしたコインを呑む。

「じゃあ、七十パイサとゆこう」に腹が大きくくえぐれ、五十パイサ・コイン一枚と、十パイサ・コイン二枚が口からこるがり出る。

「よいしや、一ルビー七十五パイサ!」これには一ルビー・コインと、二五パイサ・コイン三枚が申し合わせたようにジャラン!

「四ルビー三十五パイサ!」とせりあがると、二ルビー・コイン二枚に、二十五パイサ・コイン一枚、十パイサ・コイン一枚が口から数珠とつながり出た。

「コインばかりじゃない、口に入るものなら何でも呑むぜ!」どこからかまた勝手知った声がある。

取り巻きがざわめき、眼にうなずき、ものは試しと靴籠、

ライター、バッテリー、クリームチューブ、口紅、電気ソケット、爪切り、ピンセット、腕時計、クリップ、小匙など、細長い物、角張った物まで観衆から次々に投げられる。行者は腹の残りのコインを吐き出し、胡坐の間に落とし入れると放られた物を拾いつまんで呑み下し、そのつどヒック、ヒック腹を波立たせて吐きだし、唾液にまみれたまま投げ主に返される。

調子づいてある男が鍵束を投げ、「いけねえ、これがなくちゃ家にも戻れなくなる」慌てて行者の許に駆けよつたが遅く、素知らぬ顔に呑み下されていた。「ちゃ、あら……」男は立ち竦み、行者の鼻先に掌をつき出したまま、その腹の蠢きを心配気に覗きこむ。

ややあって、その掌に行者はジャラリ、鍵束を吐きもどしてみせる。男がやれやれと去りにかかると、行者は男の手首を抑え、捻り返し、その掌にゲ！ もう一個の鍵を吐き足した。「あれ！ こりあ車の」男の頓狂な声に観衆がド！ と哄笑する。

投げられる物はだんだん値の張るものになってきた。ブローチ、指輪、金時計、イヤリング、琥珀のパイプ、真珠のネックレス。

ある婦人が髪留めを放ったときピンが止め金を外れていた。それを見ていた脇の男が携帯用万能ナイフの缶切りをわざと軸に立てて投げた。行者はそのまま呑みこんだので

な呻吟が僕らを地獄にひきこんだ。

やがて脚が下り、腰が落ち、再び座位にもどりとくつと、潰したように縮み重なった顔の皺が僅かずつ伸びずり返り、ピカリ！ 剃刀の刃が舌の上に光を放った。

観衆は我をわすれて歓声をあげ、コインの礫が行者の足許をとびはねた。だが、それらはワツと群がりたかる子供らに煎り水と消えていた。行者の身体が彼らに蹴りこづかれても、なすに任せて瓢箪を膝間に搔い込んだまま結跏の行に余念がない。

陽が高くなり、市が齒のぬけたように店閉いし、人混みがうすらぐ頃合をみて、行者は結跏をとき、膝下に迷いこんでいたコインを掻き集めて手に握り、眼の上にかかげてから腰の布袋におとしこみ、瓢箪の水を飲みほし、鳩尾から腹にかけ痙攣をおこしたかに揺ると、腰布を絡げあげ尻を立てた。アヌスからパイ！ と水しぶきが噴き出、立ち去りかねていた観衆がワァ！ と道をあける。それをよそに地面に突き立てた杖に結ばれている白衣の上下を身につけ腰紐に瓢箪を下げると、行者は杖を手にすたすた歩き出した。ほとんど影を印さぬ白い大地に黒い染み痕をのこして遠ざかる、角張った薄い背を僕は白昼夢にかけられたようにうっとり見送っていた……。

そのときだ、「あ！ 財布がない！」という叫び声に背を貫かれた。「私のも！」という声がつづいた。僕も慌て

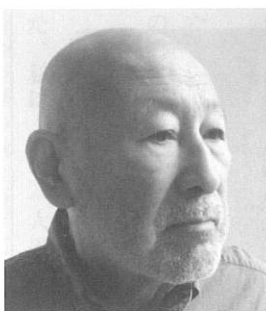
僕は目を剥いた。なりゆきを見守るうち行者の腹がせりだし、縮んだとみたら碧色の軸が口に銜えられていた。なんと缶切りは軸に収められていた。

観衆は興奮のあまりケモノと化していった。薬物容器、ガラスビン、ビール缶やホーク、電球を踏みにじって潰し、ひしゃげ、ささくれた物まで撒かれた。そのとき行者の選んだヒラヒラする光物が安全剃刀の刃と知って僕は総毛だった。行者はそれを指の間に挟んでしばらく瞑目していた。腹が洋の夕風と静まり、禪定印に結ばれた掌の剃刀の刃だけがどぎつい炎天の陽をはじいている。

「……」重い沈黙に應えるかに行者はうなずき、舌のせ、そのまま丸めてやおら喉奥に沈め、傍らの瓢箪を取りガブガブ喉音たてて水を飲む。腹が膨らむとともにゆつくり喉仏を上下させ瓢箪を元へもどす。鳩尾から腹にかけての波動が微妙にうねり、それがかすかすになり、またせり出した。さすがにその後は、ヒック、ヒック、ゲー、ゲー！ と喘ぎ、腹、鳩尾だけか、体中の筋肉瘤がおどりのたうち汗が全身から噴きだした。

キイー！ 金髪の夫人が悲鳴をあげて卒倒した。行者の身体はまるで磯巾着のようにしぼんではふくらみ、腹がよじれるほどに波うった。座位がくずれ、地に這いつくばり、震えた身体がまるまり、地に手をつき、尻が、脚が持ち上がり、宙にもだえ、口からだらだら涎が垂れ落ち、苦しげ

て懐をさぐった。やはり財布の手触りはない。それに股の間をスーッと隙間風がおおっている。そこに挟んでいた「阿弥陀の掌」も消えていた。



ならば たかし

1930 東京生まれ
55 武蔵野美術大学卒
75 スウェーデンに移住
2006 オランダに移住
石彫にて美術活動が続ける
11「文芸思潮」エッセイ賞優秀賞

受賞の言葉

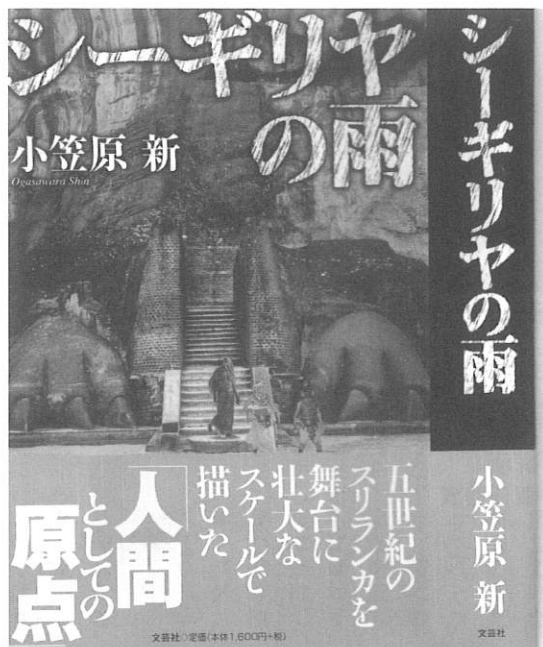
ならばたかし

優秀賞受賞の知らせを受けたのはテレビでオリンピック中継を見ていた際でした。電話の内容に僕の応募が最後の行で当選を逸したことを知り、ゴールにしくじった選手並みの気後れで思わず映像を切ってしまい、跡に腰布ひとつの行者が聖火を掲げて走っている残像を見て、あらためて受賞の喜びが湧みあげて来るのを受け止めていたというのが正直のところですよ。

行者は今しがたスクリーンに見ていたプロバガンダ・オリンピック・ゲームの真向彼岸にある（無為）だからこそ心眼に達し腹中が読めた、いわば行者の身体がメビウスの帯だった？ あれがマヤカシだったのか、真のマスターだったのかは分かりませんし、分かつとも思いません。聖だったか、邪だったかも分からない。それは別としてともあれこのショックに出会ってから僕の人生観は一転しました。

そして日本を離れヨーロッパをさすらううちにスウェーデンで黒御影石と巡り会い、あのとときのショックを再び目の当たりにしたのでした。なぜならこの石は研磨することで奇しくも二つの裏腹の表情を顕わし、それが行者の身体に重なったのです。以後僕はその石を下げてヨーロッパの旅を続けることになりました。

エッセイ風ですが、この行者との出会いは僕の人生路の最大のメドになる体験で、一度書かねばと思っていたことでした。それだけに電話でお褒めに預かった筆先の迫力？となつて噴き出したものでしょう。どうじにその気張りが最後の部分で土俵を踏み外すことにもなりました。



アヒルが消えた日

むかいはつこ

第80回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

Essay

昭和二十三年三月のある日、五歳の私は狂喜乱舞し、あぐくに熱を出して、両親を慌てさせた。

それは、四月から幼稚園に通うことを知らされたからであつた。

近所に友達もなく、退屈しきつていた時に、あの幼稚園に通うのだと言われたのだから嬉しくないわけがない。

幼稚園のことはよく知っていた。幼稚園は保健所の隣にあり、予防接種のため母に手を引かれて保健所に通うたび、その様子をつぶさに観察していた。

何にもまして私の目を引いたのは、遊動円木であつた。太い丸太状の物の上に五つ六つの取っ手が打ち付けてあり、乗り手の体の動きで前後に揺れるのである。時には激しく揺れて、その上から園児が転げ落ちる場面も目撃した。それでもその子は泣くこともなく、また仲間に加わろうと、

前へ後ろへと遊具の後を追うのだった。つまりは、それ程楽しいのだ、と、私は想像した。

幼稚園は、子どもの足で歩いて二十分ほどのところにあつた。同じ地区の子どもたちでグループを作り集団登園するのだという。

最初の一週間だけは親が交代で付き添つた。

男の子三人、女の子二人の五人が私たちのグループだつた。私は、もう一人の女の子、よっちゃん、と手をつなぎ、温かい春の陽を浴びて、土道をポクポク歩いた。何やら黄色い花が群れて咲く平坦な田舎道は、どこまでものどかである。やがて道に沿って細長いため池が現れる。ため池の、道路に面した側には、粗く板を打ち付けただけの粗末な囲いがあつた。

ため池には十羽ほどのアヒルが放たれており、昼過ぎに

は開い込まれるのだった。

風呂場にあるセルロイドのアヒルは、全身黄色であったが、池のアヒルは、くちばしだけが黄色かった。体は白く、中には茶色の斑が混じったのもいた。

私たちは歌を歌って歩き、アヒルたちは、ガアガアと泳いで池の端まで付いてきた。

最初の一週間の内で分かったことがあった。

それは、例の、遊動円木のことだ。遊ぶ順番が単に早い者勝ちだということである。そこで、私たちは集合時間を少し早めてもらって、週の終わりには首尾よく、五人そろって遊動円木の乗客となれたのであった。

その楽しいことといったらなかつた。咽のどこからあんな声が出るのか、我ながら呆れるような嬌声が園の隅々まで響き渡ったものだ。

いよいよ、子供たちだけで登園する日がやって来た。

もうすっかり馴れて、不安に思うことも何もなかつた。母親たちも、荷を降ろしたように、一様にホッとした顔をしている。集合場所まで送り迎えすれば、あとは幼稚園が面倒をみてくれるのである。

それでも母親たちは、口々に注意をした。それは、ため池には決して近寄らないこと、であつた。注意をする必要などなかつたのである。私たちは先を急ぐのだ。ため池に立ち寄って道草など食う余裕がない。なにしろ、あの、遊

動円木が待っているのだから。

私たちは、言いつけどおり、確かに、ため池には近付かなかった。

近付いてきたのは……ため池のほうだった……。

その日、いつものとおり、集合場所に集まり、母親に手を振って、私たちは幼稚園へ向かつた。ため池の端まで来て振り返ると、母親たちは、もう姿を消していた。アヒルは私たちと歩をあわせ、ガアガアと賑やかに泳いでついできた。

と、先頭の一羽が、土手に這い上がり、残りのアヒルも、いつせいにそれに倣つたのだ。あつけに取られて見守る中、一羽が木の柵の下、ほんの二十センチほどの隙間から首を突き出し、やがて、奇妙に体をひしゃげ、ノタノタと道路に出てきてしまった。次から次へとアヒルが続き、とうとう、ため池にアヒルが一羽もいなくなつた。

近くで見るアヒルは、意外に大きかつた。威張るように胸を張り、くちばしと同じ色の黄色い三角の足で、ピタピタと私たちに近付いてきた。

アヒルは私たち五人をグルリと取り囲み、興味深そうに、ジロジロと観察した。背中に茶色の羽が混じつたアヒルは、私の通園バッグに興味を持つたらしい。それは、母の手製で、蓋に赤いチューリップのアップリケが縫い付けてあつた。そのアヒルは、私に近付くと、フムフム、とバッグを

ある日、根負けしたかんちゃんのお母さんが、一日だけの約束で付き添ってくれることになつた。

これで私たちの話が本当だと分かつてもらえる。そして遊動円木に乗れる……。

ところが、アヒルは、私たちと並んで、泳いでついで来てはしたが道路へ出ては来なかつた。かんちゃんのお母さんは、呆れたように大きな声を出した。

「どこが恐いのっ！ 可愛いじゃないのっ！」

私たちは途方にくれた。まっちゃんが口惜しそうに唇を噛んだ。

翌朝、まっちゃんは竹の棒を持ってやって来た。

「これで追い払ってやる」と言う。

「そうか、もっと早くからそうすればよかつたんだ」
私たちは急に元氣付いて、勇んで出発した。

アヒルは人の心が読めるのだからか……。その日、アヒルは、端から攻撃的だった。まっちゃんは、あつという間に取り囲まれた。アヒルは短い足を上げてまっちゃんの足を蹴った。飛び上がって、両足で蹴るのもいた。

まっちゃんの陽に焼けた茶色の足に白い筋が数本浮かび、やがて、じんわりと血がにじんできた。まっちゃんは、慌てふためいて、棒を振りまわし、地面ばかり叩いた。思いがけない攻撃にまっちゃんは度を失い、持ってきた竹の棒にすがりついて大声で泣いた。私たちは全面降伏状態に

アヒルが消えた日

私たちは口々にアヒルの所業を親に訴えた。私も手の甲にうつすらと残る赤い筋を見せた。だが、どの親も全く取り合なかつた。切り傷、擦り傷は日常茶飯事である。手の甲のかすかな傷など何ほどの説得力もなかつたのである。アヒルは私たちの通りかかるとの毎朝待ちかまえていた。遊動円木に乗れない日が続いた。それだけは、どうしても我慢がでなかつた。

私たちがあまりにもアヒルが恐いと訴えるので、ついに、

陥った。

それからというものの、私たちはアヒルに一切逆らわなかった。すると、不思議なことに、アヒルの方も穏やかになり、私たちに対する興味も幾分、薄らいでいくようだった。

見上げてくるアヒルの目に、もう、あの赤い光はなかった。ビーズ玉のように黒く光る、もの間いたげな目だけがそこにあった。

私は、背中の茶色いアヒルに、通園バッグの中を見せてやりさえした。アヒルは、伸び上がってバッグの中へくちばしを入れ、納得したように私を見、クワクワと小さく鳴いた。「ありがとう……」と聞こえた。

譲歩することで、私たちの通園は、以前よりスムーズになった。それでも、他のグループに遊動円木を取られ口惜しい思いをすることがたびたびあったのである。

「アヒルさえいなければねえ」この思いは、五人に共通したものであったろう。

入園して二ヶ月ほど経ったある日の朝、ため池にアヒルの姿がなかった。

これ幸いに、私たちは小走りに幼稚園を目指した。その日は首尾よく遊動円木を手に入れ、堪能するまで遊ぶことができたのである。

帰り道、ため池にアヒルの姿は、やはりなかった。みんな

かがゴロゴロしていた。

ビーズ玉のような、あの目を思い出していた。そして、あのアヒルは、死ぬ時何を考えるのだろうかという想像した。私のことを想うのかも知れないと考えると、それが耐えようもなく恐ろしかった。

「私たちが言いつけたせいじゃない。そうだよね」

たった今、誰かに尋ねてみたかった。

そして、「そうじゃないよ」と答えて欲しかった。

あとからあとから涙が湧いて出た。止まらない涙を持って、余しつつ、その一方で、哀れなアヒルのことを考えると、この程度の涙では済まされないように思えた。

翌朝、集合場所に集まった五人は一樣に元気がなかった。それぞれにそれぞれの思いを胸に秘めて口をつぐんでいた。私たちは、ため池を見ないように下を向いて歩いた。

それでも、目の端にアヒルのいないため池が映った。水の色は黒く、その向うの黄色い花の群もいつの間にか濃い緑色に様子を変えていた。

私たちは幼稚園に一番乗りし、惰性的のように遊動円木にまたがった。

あれほど憧れ、取り合った遊動円木が、今は、その上に乗り、さほど嬉しくもなかった。ピカピカ光って見えた遊動円木も、よく観るとあちこち塗料がはげていた。「ここ、

な小首をかしげ、その姿を捜したが一羽も見あたらない。

私は家に帰ると、早速そのことを母に報告した。

「売れたんでしょ」母は背を向けたまま言った。

「売ってどうするの？」

私の問いに、妙な事を聞く子だという顔で、母は振り返った。

「お肉にして食べるのよ」

私は膝から力が抜けるほど驚いた。

ニワトリなら、そのことを知っていた。しかし、アヒルも同じ運命をたどるのだとは想像もしなかった。肉になるということは、その前に死ぬことなのだ。

「いなくなつてよかったじゃないの」母は事もなげに言う。体の奥から何やら大きなうねりが上がってきて、突然、涙がほとばしり出た。

「ちがうよっ！」

私は叫びながら母を蹴った。ちようど、まつちゃんを蹴ったアヒルのように。

「ちがうよ！ ちがうよ！」

私は、自分でも何が言いたいのかわからないまま繰り返し母を蹴った。

母は私を持って余し、ついには腹を立てて私の頭をパシリと打った。

叩かれても痛くなどなかった。胸の中にはもつと痛い何

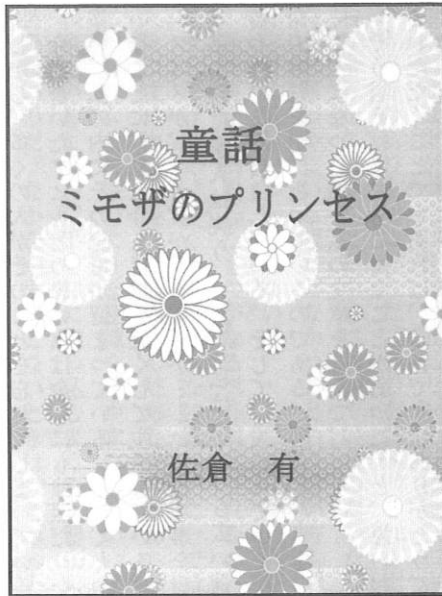
サビてる……」かんちゃんが取っ手を指さし、ぼそりと言った。

昨日と何かが違ってしまっていた。それが何なのか分かんなかった。

ただ漠然と不安で悲しかった。

アヒルが消えた日、私たちは少しばかり成長した。

アヒルが消えた日、私たちは人間なのだ、と知った。



ヒロエンタープライズよりアマゾンにて販売中
「ミモザのプリンセス」「さっぽろメモリアル」
楽天 kobo://rakuten.kobobooks.com/

受賞の言葉

むかいはつこ

人間に生まれたから人間になるのではない、とはどこかで聞いた言葉である。幼い頃は自分を取り巻く全てのものが畏怖すべき対象だった。同じ高さの目線で見、時には見上げ、自身の身を低く置いていた。私もそうだった。だから、毎日、決死の思いでアヒルとせめぎ合ったのである。その結末は、アヒルにとっては真に理不尽な、また、私にとっては、いきなり頬を打たれるような衝撃的なものだった。『卑怯』という言葉を知らずも、自分を恥じたのであった。誰もが同じような経験をしている。そうして人間になったのだ。

しかし、多くの人がそのことを忘れてしまっている。今回書いたアヒルとの思い出は余りにも強烈だったため、幸い、私の内にその記憶が留まっている。そしてもっと幸いなことに、私は今も視線を低くして生活している。「スズメが、トカゲが、ミミズが……」と出来事を報告する私を時に家人は笑う。しかし私は誰よりも広い世界を持つていると自負している。そして、失われていく膨大な命の継続を切に祈っているのである。図らずも賞をいただくことになった拙い私の文章を読んで、「そう言えば私にもこんなことがあった」と、思い起こしていただけであってもあれば、幸甚です。ありがとうございます。



むかいはつこ

1943 大阪生まれ
現在、横浜在住
大阪外国語大学（現、大阪大学）卒業
この10年程は絵本製作に励んでいる
「ひねもす山のなかまたち」のシリーズで、(1)～(6)話まで刊行 現在(7)話を製作中
毎回、250冊を全国50余りの病院の小児科へ寄贈している

鉄塔

さいとうみち子

Essay

第8回
文芸思潮
エッセイ賞
優秀賞

「学生時代、夢中になったものは何ですか?」「土手、です」

入学したてのときに張り切って入部した競技ダンス部は、ゴールデンウィークが明ける前に辞めてしまった。元々、集団で行動するのが好きではないことは自覚している。授業でも昼休憩でも、中学生じゃあるまいし、特定の友達とつるむことはなかった。たまには、何かのきっかけで仲良くなったいろんな友達と、一緒に美味しいランチを食べに行ったりお酒を飲んだりした。気さく乗れば、文化祭の出し物や学外のクラブイベントなども単発で手伝ったが、その仲間ともそれ限りの関係だ。そして二十歳のとき、私は気づいた。秘密を抱え込んだ者は、一つの集団に長く留まることはできないのだと。そうした人間は、一定

の人と余り多くの時間を共有してはならないのだ。私の秘密? どうしてあんなに私が痩せていたか、そこに秘密がないわけはなかった。身長一五二センチ、体重三二キロという当時の私の生活は、ただ、ものを食べ、それを文字どおり全て吐き出すことを中心に回っていたのだ。だから人と関わっている暇などなかったという言い方も、ある意味では正しいかもしれない。

過食嘔吐。摂取したものがなるべく消化されないうちに、できるだけ早く、多く吐く。そんなに難しいことではない。大量の食べ物を短時間で詰め込んだあと、みぞおちの辺りに、もやもやと煙のような意識を集中すればいい。よく言われているような、手を口に突っ込むような乱暴な行為も必要ないのだ。なかなか出てこないときは、ちよつと胃の

辺りを握りこぶしでぐいと押してやればいい。すると然るべきドアが開く。あとは、ごろり、だ。脳や手先に、ぴりぴりと軽い痺れを感じる。眩暈の中暗くなった視界に、紫色と緑色の円が池の波紋のように広がる。深く呼吸し、肺に新鮮な酸素を取り込む。美味い。

理由は無い。はじめは痩せたいと思っただけのさ。習慣になってしまっただけのさ。忘れてしまったし、思い出そうとも思わない。しつこく言うならば、軽い義務感のようなものだ。私が私であるためにやるべき仕事。心身の倦怠感や徒労感とともに訪れる恍惚の達成感も、やがて麻痺していく。そして、腹と、胸と、時間の空白だけが、そこに残る。一連の作業が終わった後、その埋めることのできない空白を持って余して、私はよく、真つ赤な自転車を当てもなく乗り回した。

だがそんなある時、その空白を突然一気に塗りつぶしてしまったものがあつた。それは、近所の多摩川土手だつた。風がだいぶ冷たくなつていた。空も雲も、水も草も、低い太陽がこぼす桃色の光に満ちていた。風が枯れかけた葉を揺らす音や、光を反射して鉛色に流れる川の音がこんなにもやかましいにもかかわらず、そのワンシーンはとても静かだつた。私は風景を隅々まで全て目に焼き付けるように見渡しながらも、脳内の瞼を閉じた。そして初めて吸い込む空気を胸いっぱい溜め込み、わざと少し音を立てて、呼

気を風景に返した。私は空白もろとも、土手の生きた絵画に溶け込んだ。

それから私は、毎日のように多摩川土手に通うようになった。国立の自宅からひたすら愛車を走らせて立川駅前を通り過ぎ、日野への市境となる立飛橋のふもとが、私の土手だつた。時間にして約三十分だが、あの至高の空気を思えば、それほど辛い距離ではない。衝突の出会いをもたらしした夕暮れ時がやはり格別だが、私は同じくらい、小春日和の日曜の昼下がりが好きだつた。川からの風は強く冷たく、髪をぼさぼさに乱したが、まだ比較的高い日はさんさんと暖かい光を与えてくれた。私は青い草の生えた土手の斜面に腰かけ、そのまま寝転ぶ。草を干したような匂いと、夏の名残の青い匂いが混じる。ちりちりと小さな虫の音がする。茂みに隠れていた鳥が驚いて飛び立つ甲高い声が開く。相変わらず水の流れる音は予想以上に大きく、すぐ近くの笑い声も遠い世界から聞こえてくるように感じる。雲一つない空は、青く、遠く、丸く、高い。私は宇宙へむき出しになる。だがそれをしっかりとつなぎとめてくれている地面は、じんわりと温かい。

そんな恵みに与っているのは私だけではなかった。すぐ下の芝生では、小さなライオンのようなゴールデンレトリバーが、飼い主の投げた黄色いボールを懸命に追いかけている。その向こうには野球のコートがあり、少年野球

のチームがユニフォームを土まみれにしながら、声を上げて走っている。あちらでは、若い男性が独り、川に真つ直ぐ向いて体を弓のように反らしながら高らかにトランペットの練習をしている。芝生と川原との境目には高い茂みがあり、その御簾みすだに隠れて、私と同年代くらいの男女が仲良く寄り添って座っている。川原は小石でできていて、そこではキャップをかぶった小さな男の子と優しそうな若い母親が、十一月だというのにその川に足をつけようとしている。私の座るすぐ後ろは遊歩道になっていて、日向ぼっこをして歩く老夫婦や、競技サイクリングのトレーニングに励むライダーが次々通り過ぎる。ふと橋の下に目をやると、帰る部屋のない人たちがダンボールの寝床から起き上がって、のんびりと釣りをしている。そう、そこは「私たちの」土手だつた。

川の向こうに、二本の鉄塔が見えた。一本は近く、もう一本はその向こうにあつて、てっぺんを二本の黒い電線が繋いでいた。離れていても明らかなほど鮮やかな赤と白の体。あの細さでしっかりと重さを支える頼もしい足。そこから頂点へ向かうしなやかなカーブ。この鉄塔が正面に見える場所、それが、「みんなの」土手における私の指定席だつた。私はその二本の鉄塔の写真を、携帯電話で何枚も撮った。彼らは、可愛らしく、たくましく、懐かしい友人だつた。

モノレールが近未来的な滑らかな機械音を立てながら、何本も行ったたり来たりする。そろそろ戻らなくてはいけない。体中に引つ付いた草の切れ端を両手でばんばんとはたいて立ち上がる。そして、私はつぶやく。「ありがとう。ありがとう」

思いが伝わったと感ずるまで、何度も繰り返す。悠久の流れを見せる川に対してなのか、寛大な土手に対してなのか、それともあの鉄塔に対してなのか、それはよくわからない。あるいは私は、その全ての景色に対して、空気と空間と時間の全てに対して、感謝していたのかもしれない。ありがとう。ありがとう。後ろ髪を引かれる思いで自転車を再びまたがる。それでもまだ口の中で繰り返す。ありがとう。ありがとう。

十二月、自転車で切る風もさすがに頬を厳しく刺すようになった頃、どういうわけか、私は複数の方面の友人に自分の秘密を明かすことになった。ある人へは業務連絡の延長のような電話で、ある人へはメールアドレス変更連絡を受け取ったついでに、またある人へはインターネットのSNSで。それは何の前触れもなかったが、不思議と動揺はなかった。胸の真ん中に、まるで硬い石がうずまっているかのように、静かな覚悟すら感じていたとも言えるかもしれない。一度ばれてしまえば、あとはどこまで広がっても同じだつた。もちろん誰もが心配した。中学、高校時代の

同級生や先輩、後輩。小学校の頃からの幼馴染。大学で授業を一緒に受けた友達。インターネット上で共通の趣味を通じて知り合った大人の友人。クラブイベントのスタッフ仲間。大学受験を控えた弟、そして、父、母。特定の集団を避け、いろんなコミュニケーションを渡り歩いているうちに、いつのまにか私には、こんなにも自分のことを心配してくれる人ができていたのだ。私はそのときやっとな、自分の闇に向き合った。行動に移すまでは早かった。大学の保健センターから紹介された病院へ行き、医師の診察を受けた。そして私の通院は、後にも先にも、この一度だけだった。

「食べて、吐いて、痩せていないと、私のアイデンティティがなくなってしまう気がするんです」「アイデンティティ」という言葉を口にしようとしたとき、喉が涙で詰まって、一瞬声を出すことができなかった。アイデンティティ。自分が自分であるという自分による認識。自分の指定席はここである、と自分で知っていること。「本当は、それ以外にもたくさんアイデンティティがあるのにな」

その瞬間、激しい濁流を堰き止めていたものが決壊した。涙は次から次へと滝のように溢れ出し、化粧のはがれた目を赤く腫らせ、呼吸は嗚咽で妨げられて、酸素を失った脳は重さを増して、骨と皮だけになった体にのしかかった。

受賞の言葉

さいとうみち子

このたびは栄えある賞をいただき、まことにありがとうございます。今年の一月、ステージ上で華々しくスピーチされている受賞者の皆さまの姿を、指をくわえて眺めていたことがありありと思い出されます。そしていざ自分自身がそのような立場を与えられたのだと思うと、もったいないほどの嬉しい思いで、不安すら感じているのが正直なところでございます。

自ら固い殻を作り閉じこもった思春期でした。蛹の間、私は何を考えていたのでしょうか。またそれを破った瞬間、私が得たあの解放感とは、何だったのでしょうか。それらは本作のみでは語りえなかったものだと、今でも感じております。自分の「アイデンティティ」の根幹を追究する作業というのは、人が生きるうちで最もつらい営みではないかと考えます。私自身の「羽化」の瞬間を詳細に記述するということは、現時点の私にとっても相当な精神力を要するものでした。しかし、それが私の人生にとって重要なステップとなったことは言うまでもありません。そしてそのかけがえない第一歩をこのような形でお認めいただけただけに深く感謝いたします。恐竜時代の化石のように確かに残り続ける、私の歴史にとって意義のある作品となりました。最後になりましたが、この場を借りて、「羽化」当時、

た。魔法にかけられたようだった。こうして私の「仕事」は、ただ一回の授業をすることもなく、医師のその一言の呪文だけで、劇的に幕を閉じた。私のたくさんのアイデンティティは、それと同じだけたくさんの大切な人たちが証明してくれるはずなのだ。

三年生になって、私は学部のゼミナールに所属した。授業が終わると文献の読解と論文の執筆に明け暮れ、ゼミのあとには朝日が昇って記憶がなくなるまで、同じ研究室の悪友たちと飲み明かした。そんな日々が卒業するまで続いた。私は土手に行かなくなった。就職して、私は横浜に引越した。私は土手に行くこともできなくなった。

東横線が多摩川を渡る。私は自分でも忘れていたほどの小さな空白が未だ残っていることに気づく。だがその空白が埋められることは決してないことを私は知っている。なぜなら私は、もう二度とあの土手に行くことはできないから。



さいとう みち子



- 1987 広島県生まれ
一橋大学社会学部社会学科卒業
事務職として働く傍ら、執筆活動を行う
- 2011 8月「女性自身」編集部編『100万粒の涙』（光文社文庫）へ、「我が家のメリークリスマス」掲載（佳作）
9月、三菱電機 DSPACE エッセイ募集「宙人ノオト。」第17回テーマ「惑星」において、「銀星」と私」採用、同社ホームページへ掲載
12月「瞳」が第7回文芸思潮エッセイ賞入選、『エッセイ宇宙6』（文芸思潮臨時増刊号 2012年1月）及び『文芸思潮ウェブ45号』に掲載
ブログ「ホウムメイカア革命」
<http://blogs.yahoo.co.jp/nmyrw789>

また細々と執筆を行っている現在において私を支えてくれている家族、友人、恩師へ、心より謝辞を述べさせていただきたい思います。最も心残りなのは、そうしてお世話になった方々の中でも、私自身の成果を見ることができないままに、世を去ってしまった大切な人たちがいるということです。初めて「物書きになりたい」という夢を告げ、文章を指南くださった恩師川島孝郎先生、若くして静かに息を引き取った面倒見のいい父方の叔母、そして、俳句等文芸に通じ、私という初孫を過保護なまでに可愛がってくれた偉大な祖父田所諭にも、どうか私の透明な翅が届きますように。

虹色のチマチヨゴリ

森 千恵子

最近、仲良し仲間が集まると、韓流ドラマの話題で賑わいます。友人たちは、憧れのスターの名を口にして少女のようにはしゃいでいます。一昔前には見られなかった光景に、(もう少し早くこんな日が来ておれば……)という思いを私は禁じえませんでした。

「韓国ドラマは、私たち日本人が忘れ去ってしまった何かを感じさせるのよ」

ある人の意見に、皆も同感だと頷いています。私は話を聞きながら、子供のころ仲良しだった韓国人少年のことを思い出していました。

彼と友達になったのは、お互いの祖父が親しく交流していたからです。私たちは、福岡県筑豊地方のセメント会社の社宅に住んでいました。当時の社宅数は日本で、多くの従業員とその家族が生活しておりました。

Kさんの作るイカの塩辛でした。祖父は酒好きで、「酒の肴には塩辛が一番」と、よく言っていました。

ある日、知人から貰ったKさんの塩辛をたいそう気に入ったので、日本語のたどたどしだったKさんにとつて、祖父は心強い友人となりました。祖父は若いころ会社からの出向で、韓国で暮らしたことがあったのです。韓国語を不自由なく話せたので、塩辛名人も祖父との会話を楽しんでいました。きつと、故郷に想いをはせる懐かしい時間だったことでしょう。

小学生の頃、祖父にベツタリだった私は、塩辛を買いに付いて行き、祖父たちを見ているのが好きでした。名人の家には私と同級生の男の子がおり、祖父たちに負けないくらい仲良くなりました。名人が、少し欠けたお玉で塩辛を祖父の手に乗せます。味見をしながら韓国語の会話が飛び交うのです。私には、何を話しているのか分かりませんが、「あなたの塩辛がいちばん旨い。名人やな」

名人の嬉しそうな顔を見ていると、そう言っているような気がしたのです。

祖父ともども楽しく過ごしていた和やかな日々、水を差すような出来事が起こりました。韓国人社宅に入りまする私たちのことを、快く思わない人がいたのです。その人が嘲笑気味に、私の母に嫌味を言いました。もともと母は、

町は高度成長化時代を迎え、つきつぎと色々な設備が整い、人々の暮らしも活気に溢れていたのです。セメントを出荷するために引かれた鉄道は門司鉄道管内一の輸送量を誇っていました。そして病院や小学校に数カ所の公園、テニスコート、プール、広いグラウンド、公民館や記念館、図書館までありました。大浴場も三カ所あり早朝から入るので、朝風呂がお年寄りたちの社交場でした。ほとんどの施設が無料で利用できたので、近隣の人々からは羨ましがられていたようです。また、食生活を支えるたくさんの商店が町の中央にひしめき合い、賑わっていました。

盆踊りやイベントが開催される中央広場の一角は、駐在所でした。裏手の社宅には、韓国人労働者と彼らの家族が暮らしていたのです。その中の一人に、息子一家と暮らすK老人がおりました。彼は優しくて朴訥な人でした。そんな彼ののもとに、祖父が通うようになったのです。目的は、

塩辛を買いに行くことには反対でした。たつぷりとコシウウの利いた塩辛を、子供の私が好んで食べるからです。他人から嫌な告げ口をされたことも、母にはショックだったのです。

社宅という世界は何か事があれば、隣近所が知恵を出し合って助け合う素晴らしい面を持っています。反対に、社宅生活の秩序からはみ出していると受け取られるような行動には、陰口が集中するのです。当時はまだ、日本人による韓国人社会への差別の激しい時代でした。Kさんはそのことをよく分かっていたようで、私の家に彼が遊びに来たことは、一度もなかったのです。Kさんは最初の頃、祖父の訪問を困った面持ちで迎えていました。私達がやって来ると近所の韓国人が、「また来た」と言つて迷惑顔になるからです。それでも、熱心に通う祖父と次第に気心が知れるようになります。周りの眼を気にしなくなつていったようです。韓国で暮らしたことがある祖父との会話の中で、故郷を懐かしんでいたのかもしれない。そして、Kさんを訪問する祖父もまた、韓国人から奇異な眼で見られていました。しかし名人のことが大好きだった祖父は、日韓両国の人々の視線を無視したのでした。祖父の言葉が、今も私の心に残っています。

「同じ人間だろう。縁があつて親しくなつたんじゃないか。付き合つて何が悪い！」

開き直っているかのようにでした。そして母にも、負けん気が目を覚ましたようでした。

「社宅というのは、物の見方にも家の数だけ物差しがあるから、ややこしい。悪いことをしている訳では、あるまいし」

これまた開き直り、社宅の婦人たちから仲間はずれにされた時期を元気に乗り切ったのです。私たちにも笑顔で接してくれました。

その一方で、周りの婦人たちには自分から進んで話しかける努力をし、嵐を最小限に食い止めてくれたのです。しかし子供の世界では、差別やいじめが露骨でした。K君は気弱な優しい子だったので、学校でいじめられて泣くことが多かったのです。反対に私は気の強い子供で、K君の分まで闘いました。こうして私たちは、ますます仲良くなったのです。

「明日、ぼくの家においで」

ある土曜日、K君から何度も誘われました。一人で訪問したことがなかったので、祖父や両親には言いそびれてしまいました。

日曜日の昼前、こっそりとK君の家に行くと、美しい衣装を着た女性が微笑んでいます。

韓国の民族衣装、チマチヨゴリを身にまとったK君のお姉さんでした。

「見せたかったんだ。僕たちの国のお祝いの衣装だよ。き

れいだろう」

K君が嬉しそうに姉の手を引っ張ります。

日頃この社宅の婦人たちは白いチマチヨゴリを着て、黒髪を小さなお団子のように束ねた姿です。共同の洗い場で彼女らが、洗濯物を棒で根気よく叩く様子を、私は飽きずに眺めたものでした。私の眼には韓国人社会の日常が、白と黒の色彩の中で営まれているかのように映っていたのです。それだけにK君の姉の美しさが眩しく、心の中に虹色が戻ってきました。七色のチマチヨゴリが、そよ風に優しく揺られて眼に鮮やかです。

「弟と仲良くしてくれて、ありがとう」

彼女は他県で働いていたのです。その日が結婚式で、近所の人へのお別れ会でした。名人の穏やかな笑顔が、ひときわ幸せそうに輝いていました。やがて心のこもった宴が終わると、迎えの人たちに連れられて花嫁一行が発発して行きます。私は町の外れまで追いかけて、いつまでも手を振り続けたのです。心地好い風に、チマチヨゴリがひるがえっていました。

その日の出来事は、初めての体験にもかかわらず、誰にも言わず仕舞いでした。どうしても言いだせない自分が情けなく、落ち込んでしまいました。そして、自分の心に打ち勝つことの難しさを知ったのです。K君の一家は二年後、祖国へと帰って行きました。

受賞の言葉

森 千恵子

今回の入賞を一番喜んでくれているのは、亡き祖父のようないな気がしています。

私は今、遠い日の塩辛名人と祖父の笑顔を、微笑みながら想い出しています。それぞれに国や言葉が違っても、人間は仲良くなれる。自分が心を開いて向き合えば、分かりあえるのだということを私に教えてくれた祖父に、感謝しています。

今年で三回目の応募でしたが、憧れの『文芸思潮』のコンクールに入賞させていただき感激でいっぱいです。私はこのコンクールの審査員の先生方の講評を、毎回楽しみにしています。何度も何度も読み直していると、その行間から書くヒントのようなものを読み取ることができます。それは、たいへん勉強になります。これからも、人に伝わる文章を書く参考にさせていただきます。これからも、人と思っています。

入賞の電話をいただいたとき、

「おめでとございます！」

五十嵐編集長さんの明るい声が、なにより嬉しいプレゼントでした。皆さま、ありがとうございます。

虹色のチマチヨゴリ



森 千恵子

もり ちえこ

- 1947 福岡県田川市生まれ
還暦過ぎから、読書好きの孫に
勧められエッセイを書き始める
2010 第8回二十四の瞳岬文壇
エッセイ 優秀賞
第4回未来を築く子育てプロ
ジェクト 最優秀賞
11 第11回西陣まいづる「帯
にまつわる話」優秀賞
12 第43回 PHP賞
第18回小諸藤村文学賞佳作

関心は半病床の中

村上 柁 しゅう

その焼き芋の、一番ねっとり濃厚な山吹色をした、それでいて香ばしく焦げ目のついたところを頬ばり、小さな長方形のバックからじゅううつと音を立てて緑茶を飲む。十五時二十分。私はこの口の中に広がる甘味が、今日の午後において最も幸福な瞬間となるであろうことに早くも見当をつけている。ちなみに午前中において最も幸福だったのは、退屈な戯曲集をようやくと読み終えた瞬間である。戯曲はもう、当分読まない。

放射線ヨード治療なんてもののために、私はお医者から三日間の外出禁止を言い渡されている。私の胃の中で溶け出した放射能たつぷりの錠剤が、春を闊歩する乙女や子供に悪い影響を及ぼすというのだから仕方がない。家にはチョコレートも煎餅も漫画もある。何一つ不自由なことはない。ただ、出るなどと言われると出なくなる。それだけで

たのだ。薬を大量の水で胃に流し込んでいる最中、先生から「学校はいつからなの？」などと話し掛けられ、軽く咽ながら「今日からです」と答えれば、「間が悪いわねえ。何でこんな日に来るのよ」と言って笑われたのでさらに咽た。私は病院側から指示された日程を守ったまでである。このように核医学には何だか変わった先生が多い。高校時代の生物の先生だとか、美術の先生だとか、そんな人たちに對するのは似たような親しみを覚える。何と愛すべき、宇宙人たち！

体温が下がっているために爪先の冷たさがどうしようもなく、湯たんぽを使うためだけに一日二度は湯を沸かす。多い時は三度沸かす。しかしそのような慢性的な寒さを除けば、私の半病人（病人と言いつけるにはあまりにおこがましい）生活は心身ともに平和なのである。そうして特にやることもない退屈の只中で、私はふと思ひ出す。そういえば、前のバイト先の友人が六月に子供を生むなあ。

彼女と私は二年前に、ほんの数日違いでその店に配属された。彼女は新入社員として、私はアルバイトとしてである。仕事における責任の重さは違えど、同じ年であった私たちは性格も合い、すぐに打ち解けることが出来た。私の学校が長期休暇の時などは、二人で店の戸締りを受け持っていて、暗い夜道をアイスや肉まんを食べながら一緒に歩いて帰ったものだ。そんな時には恋愛の話をしたし、それ以上に

ある。

治療を経験するのは今度で二回目である。これは甲状腺がんの手術の延長線上にあるものであり、人の手では取り除けないような砂のように細かい腫瘍を薬によって治す。つまりは仕上げのような作業なのである。昨秋に始めてこれを経験した時は、人氣もなく薄暗いフロアーの、さらに陰気さを極める一室に通されて薬を飲んだ記憶があった。大したことのない病気であるのに、あれでは何だか大したことのあるような気がしてしまふ。

しかし今回は患者の多い季節であったせいか、フロアー中が明るくて人も多く、春という季節そのものの温かさも手伝って、実に朗らかな気持ちで治療を受けることが出来た。歯医者で診察が済んだ後に「口を濯いでくださいね」と言われる時のような、あんな雰囲気があるには溢れている。最初に生理が来ないと打ち明けられたのは、昨年八月のことである。以降、彼女は私と顔を合わせるたびにそれを口にするようになった。私に言ってしまうことが、彼女の気持ちを一番楽にしたのだらうと思う。私は「大丈夫だよ」と言うばかりで、いつまでも検査をしない彼女の無精さについては一言も触れなかったから。そして秋が深まるにつれて彼女は寡黙になっていき、帰り道にある焼き鳥屋で一杯やる約束は、いつの間にかお流れになっていた。まもなく私は一度目のヨード治療のために、二週間の休みをとった。

そして年明け。腹の中にもう一つ命を抱えているとは思えないほどの、相変わらずの無精さながらも、彼女は自分の将来と真剣に向き合い始めた様子であった。しかしあらゆる方面への手続きや諸々の話を聞いていると、その全てに宿題を残したままの八月三十一日のような、子供じみた焦燥を感じて不安になった。「子供に子供が育てられるのか」と言った従業員がいるとチーフに聞いたが、それが誰なのかは教えてくれなかった。本当はそんな人物などいなかったのかもしれない。このように自身の本音を架空の「誰

か」に託して間接的に述べる方法は非常に円満で賢いやり方でもある。しかし、それによって倫理の偶像なるものを見出すことが出来ずに、私達の生活は良くも悪くも多様化していくのかもしれない。

私が三月いっぱい退職することになり、二人で帰る最後の夜に彼女は言った。自分も四月いっぱい仕事で辞める。そして暇が出来たら一緒にご飯でも食べに行こうと。私には彼女に暇が出来て根拠が見つからなかつた。あの若い男と一緒にいることで彼女が専業主婦になれるとは到底思えなかつたし、食べさせて寝かしつけるだけが子育てではないことも容易に想像がついた。しかし私は、例のごとく「そうだね」とだけ言っておいた。私ぐらいいは揚げ足を取らないで置いてやるべきだと思つたのだ。彼女は周りの人から怒られ過ぎる。いい加減だから。

外出禁止が解かれた瞬間から、新生活は容赦なく私の平静に雪崩れ込んでくることだろう。慌しく授業の選択を迫られ、奨学金の継続手続きがあり、ばたばたしているうちにゴールデンウィークが来てしまう。その頃にはいよいよ本腰を入れて新しいバイト先を探さなければいけない。まず二、三日で見つかることはないだろう。職を得たと思つた頃にはきつと前期の試験が迫っている。そうしてやつと一息つく頃には、もう子供が生まれているのだ。きつと。UFOキャッチャーに興ずるあまりに増えすぎたぬいぐ

とが出来なかつた私の感性に大きな希望を与えてくれた。だから何処の誰がどのような評価をしようと、私は彼女がことが好きなのである。つまり、これは決して悪口ではない。そのことをくれぐれも解っておいてほしい。

彼女はあばずれでした。

受賞の言葉

村上 柀

執筆にはいつもパソコンを用いるのですが、うちには家族共有のものがリビングに一つあるきり。作中でも述べたような事情で自宅から出ることの出来なかつた今回は、原稿用紙と鉛筆での作業になつたのでした。最近では学校のレポートを書く時くらいにしか使つた記憶がなかつたのですが、たまには良いものです。最初は不器用に書いては消して、書いては消してを繰り返していたものの、後半では消しゴムの手間も煩わしく、用紙の余白を真っ黒にしなから書き上げました。清書をする段階で切り捨てられてしまった稚拙な表現、余計な説明、または最後まで入れるか迷つた文句、私はそれらのものを未だに愛おしく感じます。それらは私の中にある混沌の一部が染み出したものであり、このたびいただいた賞が、そこへ差し込んだ一筋の光であるからです。



村上 柀

むらかみ しゅう
1991 東京生まれ
日本大学芸術学部文
芸学科在学中



人が誰かを愛したり憎んだりすることに普遍的な定義はありません。優しさが憎いこともあれば、残酷さを愛さずよって誰かに思いを抱き、ときにはその基準に従おうとしない衝動や本能に苦しめられるのです。そんなわけで、私は私なりに、彼女を一人の友人として確かに愛していたのです。傍目から観れば突き放したような態度に見えたかも知れませんが、殴り合ったあとに抱き合うだけが友情の形ではありません。

彼女は今頃どうしているのだろう。これを機に、さりげなく連絡をとってみようかなどと考えています。

るみの山を見る時みたいな、軽いうんざり感でもって、生まれる前から既に「ぶつちやけ、いらぬ」と言われている子供が生まれてくる。それも私の友人の腹の中から。しかもその時私は自分のことで精一杯であり、そんなこと全然気にも止めないのだろうということまでが既に分かっている。

妊婦と学生とはどっちがどうか、そういうことではない。ただ若者は、若者というだけで個々に忙しい生き物なのであって、さらに生活の上では大した接点もないと来てしまえば、もう相手の動向など分からない。そういうものなのだ。

ただこうやって、「少なくとも三日間は外出禁止です」とお医者者に言われて自室に閉じこもり、食欲もないし、本もつまらないし、そういう時にふと思いつき出ただけなのである。あのお腹の中には本当に命があるのだろうか。小学生の時によく遊んでいた、あの大きくて柔らかいドッジボールが入っているだけなのではないか。私はパチンコを打つ彼女の足元にボールが転がっている様を想像した。暇を持って余してさえ、私の関心はどこか冷めていて残酷だった。

私はビッチが嫌いではない。性に奔放であること。それ自体がヒトとして、素直で潔いことのように思う。彼女を前にするとなおさらそう感じる。性を語るその表情には不思議な無邪気さがあり、それを薄闇にしか結び付けるこ

空へ登る汽車

田中濱子

昭和三十年代の初め、高梁町はまだ蒸気機関車が走っていた。やがて高梁町は合併されて市となり、蒸気機関車もディーゼル車に変わっていったことを記憶している。

当時私は小学校三年生で、母の病気のため、遠い村から引越してきたばかりだった。

初めて見る蒸気機関車は、とてつもない大きさで圧倒された。車体の前に立つと、見上げる岩のように高く、車輪は分厚く黒々としていて、その向こうにある鉄の壁は細く太く入り組んでいて恐ろしかった。シュツシュツ!!と蒸気が噴き出すと、思わず飛び退き耳を押さえた。汽笛が鳴ると、地が震え、辺りが引っくり返るのではないかと思えたものだった。

その汽車を、五歳の妹の千代が、毎日見に行っていたことを後で知った。

私の家から駅までは、路地裏の細い道を通り、民家の軒

私と妹は家に取り残された。仏壇の前にはまだ白い布に包まれた骨箱が置かれていて、その向こうに二枚の写真があった。一枚は母の若い頃だろう、ふつくと太って女学生のような着物と袴姿だった。もう一枚は骨箱をひぎに抱えた父を中心にとった家族の写真。後列に姉と兄と私が立ち並び、妹は父の横に立ち、小さな体を骨箱に寄り掛けている。みんな遠くを見ていて、とても寂しそうに見える。

どうしてこんな写真を撮ったのだろう。私はむしろに腹が立って、いつも仏壇の傍を通る時は、目を背けたり、近づかないようにした。

がらんとした家に帰るのが嫌で、放課後友達と遅くまで遊んだり、貸し本屋に立ち寄り時間を過ごした。

千代はどこかへ遊びに出ていたが、気にもとめなかった。それでも夕方になると、さすがに気になって探し呼び戻した。千代は誰もいない道路で一人で遊んでいた。友達の家や庭先で、ぼんやりと佇んでいることもあった。近所の家々は、夕餉の支度に慌ただしい時間なのに、その家の台所に上り込もうとしている時など、強引に連れ戻した。

姉が帰宅するまで時間があがり、千代の相手をしなければならなかった。千代は遊び疲れ、お腹を空かしぐずついた。私は塗り絵や切り絵をしたりして機嫌をとった。

特に雨の日は私を困らせた。じっとしてなくて、外へ出たがった。塗り絵に飽き、当時人気であった少女雑誌の中

先をぐりぬけ、溝川沿いに商店街へ抜ける。駅前の広い通りまでゴタゴタしていて、かなり距離があるように思えたが、大人になってそこを訪ねてみると、それほど長い道のりではなかった。

小さな畑を背に混み入った住宅の裏手。五軒長屋の一番奥が、私達の引越し先だった。

玄関横の四畳半の部屋に母は寝ていた。その母を中学生の姉が見て、父は近くの製材所に働きに出ている。母の病気が結核で、すでに手遅れだった。一年後には細く小さくなって亡くなった。悲しみは深く、私達は途方にくれた。けれど、悲しんでばかりいられなかった。母の病氣治療のため、すべての家財を売り払って、家には余裕はなかった。姉は進学を諦めて、近くの市場へ働きに出た。中学生になったばかりの兄は、寂しさのあまり友達とたむろして、夜遅くまで家に帰らなかった。

の、目の大きな挿し絵が私には気に入っていて、描いてやっていたが、それでも喜ばない。汽車の絵を描いて欲しいとねだった。描いてほしいと言われても、どう描いていいのか分からず困りはてた。押し入れの中から兄の少年雑誌を取り出し、見よう見まねで描いたものの、私は途中で止めた。汽車は恐ろしいばかりでなく、苦い思いがあった。

母の薬を取りに行く病院が、川沿いの坂の上にあつて、その横を汽車が通っている。汽車が鉄橋を渡る度、汽笛を鳴らす。その音は待合室まで響き、耳を塞ぎ、ふるえながら小さくなっている私を、まわりの人はクスクス笑って見やる。千代はそんな私の気持ちなどかまわず絵をねだった。やがてその中から一番気に入った汽車の一枚を、父に買ってもらったピンクのビニール製のバッグの中に、大切にしまい、抱えて眠った。

それから毎日がまわっているうちに、私は少しずつ上手になった。時にはお話を付けたりして楽しみ、私も千代も少しだけ淋しさを忘れた。

ある日、千代がいつまで経っても帰らなかった。辺りは何時の間にか、薄暗くなっていた。私はいつも遊びに行く空地や友達の家、その庭先や裏の川原を探した。姿が見当たらない。次第に不安になった。その時隣家の小父さんが「駅前で見えたよ」と言い「汽車を見に行っただちがうか」と教えてくれた。

私は駅前までの道を急いだ。入り組んだ道を、迷子になったのではないか、千代の小さな足が今も駅に向かって走っているように思えてならなかった。結局姿を見つけないことができず、家に帰ると、千代は飯台の前にちょこんと座っていた。私は強く叱り、一人で行かないように言いよかせた。それでも分かったのか分からないのか、二度三度同じことをくり返した。

その日も千代は帰らなかった。私は駅前の公園へ急いで行った。公園には汽車がよく見える場所があつて、線路の周囲まで背の高い草が生い茂っている。

千代はその前にある柵に、しがみつこうようにして汽車を見ていた。汽車は白い蒸気を立てていた。線路の向こうは茜色で、青味を帯びた黒い山がせままっている。ホッとしたのも束の間、汽笛がきこえ、私は一瞬怯んだ。汽車がゴトンゴトンと音をたて動きはじめた。その時だった。千代が柵をめぐり草地の中へ駆け出した。動く汽車を追う。彼女の足は速く汽車は速度を増していく。草の中を掻き分けて行く汽車が、連れ去っていくように思つて、バカバカ！と叫びながら、私は後を追いかけた。やっと追いつき千代の体を乱暴に掴んだものの、草の波に足を絡めて、二人でもんどり打った。泣きべそをかく千代は一枚の紙をしっかりと握っていた。くしゃくしゃになった紙には絵があつた。それは私が描いたもので、「この汽車に乗って空へ行けば、

妹は首を横にふった。

「……ただ、まこちゃん（妹は私をこう呼ぶ）が描いてくれた絵は記憶している。空に向かって走っていく汽車」

妹の目に涙があふれた。

その時汽笛が鳴り、電車が動き出した、私達は並んでそれを見た。澄んだ空に、山波が日の光で輝いている。スピードを増した電車はどんどん進んでいく。それはまるで高く広い空へ吸い込まれていくように見えた。

受賞の言葉

田中濱子

文章を書くのが好きというよりも、自分の気持ちを表現できるものを探していました。

その元になるのは私の少女時代に起因します。

母を結核で亡くし、その母の結核が私に感染し、小学校四年から三年間酷い苛めを受けました。度々の休学と留年とで、私の少女時代は暗いものでした。大人になっても抱え込み、なんとか胸の奥にある物を吐き出したい、そして気持ちを前向きにしたいと思ひ過していました。

四二歳のとき、家族（子供達）を納得させ、と言うよりも私の気持ちを優先させ、大阪文学学校に入学しました。

お母さんに会える」と話しさせた空へ登る汽車の絵だった。

空は晴れ渡り、ゆつくり雲が流れている。五月の風は心地よかつた。

妹の娘あやが結婚式を終え、新婚旅行へ旅立った。電車を見送った後、去りがたく、私と妹は駅前の公園に立ち寄った。二十数年ぶりに訪れた公園は昔のままだった。遊具が増え、周囲を背の高い木々を取り囲んでいたが、フェンスの向こうの草地は変わらず、今日も草が青々と茂っている。「いい式だったわね」

私はあやが、両親に述べた感謝の言葉の一部を思い出していた。

——お母さん今まで、我がままいっぱいだった私を見守り伸び伸びと育てて下さって有難うございました。それでもお母さんの言うことが聞けずに反抗することがありました。その度にお母さんが「私は幼い頃から母を知らないから、あやをどう育てていいか分からない」と悲しそうに言っていた言葉を、忘れることができません——

妹はフェンスにしがみつこうようにして草地を見ていた。

その背中にふいに昔のことが浮かんできた。振り向いた妹に汽車の話をした。

「憶えている？」



田中濱子

たなか はまこ

- 1943 広島県生福山市まれ
- 53 岡山県高梁町に移転
- 75 関西医科大学付属看護学校卒
看護師
- 83 大阪文学学校で文学を学ぶ
- 96 訪問看護再開
- 2008 「雪溪文学」同人誌に参加

ここでは、文章を書くことの意味、本の読み方、多くの人の出逢いなどあり、大きな刺激を受けました。それで文章が書けるようになったかと言えば全くだめでした。知れば知るほど、肩に力がいり書けません。暫く書くことから離れ、訪問看護の仕事を始めました。多く人と接することはスムーズにいくとばかり限りません。むしろ反対のこのほうが多い。けれどそれを目にすればするほど、書いてみたい思いが強くなりました。やっと文章が書けるようになったのは、数年まえからです。

この度、私の作品を選んでいただき本当にうれいす。有り難うございました。

これからも書き続ける大きな励みとなります。

みたらし団子

奥田 登

京都北野天満宮の縁日は、毎月二十五日になっている。参道の両側に屋台店が並んでとても賑やかだ。その中のみたらし団子屋の前で足が止まった。この匂いには、遠い遠い思い出がある。

若くして寡婦になったおつ母あは、三人の子どもを抱えて困っていた。小学五年の長男が、口減らしのために山間の村から名古屋の洗濯屋へ年季（奉公）に出た。半年ほどした頃、洗濯物の敷布を遊郭のどこかの店へ間違えて配達してしまい、主人に叱られ、学校を休んでその日の配達先二十軒を訪ねて回ったが出てこない。

遊郭の街外れにある地藏堂の横に自転車を止め、切石に腰掛けて泣いていた。

「坊。こんなところで何を泣いとるだか」

太い声に驚いて後ろを振り向くと、前々から怖いと思っていた女衞のおじさんが立っていたので、涙がいつぱんに

止まった。女衞のおじさんは、娘さんを売り買いする悪い人だから、恐ろしくて声も出ない。

「里のおつ母あが恋しゅうなつただか。君は偉い子どもだ。五年生やそこらで年季に来て、ようがんばつとるだわ」

おじさんは、並んで座ると腰のキセルを抜いてタバコを吸いながら

「わしも、この仕事を人助けと思つてやつとるだが、世間は、人買いか女衞とか言つて白い目で見る」

おじさんは、しばらく自分の仕事の辛さを話した後、懐から大きなガマ口を取り出すと、五十銭銀貨をつまんで

「坊。これであそこのみたらし団子を食べて元氣出せよ」と言つてくれた。この頃、姐さんたちの花代が一円五十銭だったから、五十銭は大金だった。坊は、震えながら両手で五十銭を押し頂くと「おおきんな」と礼を言い、郭の中のみたらし団子屋へペダルを漕いだ。

田のおじさんと答えた。すると、三人の姐さんは一斉に

「ええつ。あの人買いの村田さんが？」

と、目ん玉が飛び出すほど驚いた様子だった。姐さんたちは、あつ氣にとられてしばらく言葉がなかった。やつとして、一人の姐さんが

「五十銭は子どもには大金だ、あの女衞のおじさんがそんな大金をくれたにやー何か大きな訳があるうが？」

他の二人の姐さんも

「そうだ」「そうだなも」

と同じだ。坊は、みたらしを食べ終えると、ぼつぼつと敷布の一件を説明した。そして、

「おじさんは敷布のことは知らない、僕が、寂しがっていると思つてくれた」と言つた。

「ああそうだ。おみゃーさん、私の店にも尋ねて来やーしたなあ」と、この姐さんは、このことを知っていた。三人の姐さんたちは、お互いに顔を見合せて何かを考えている様子だった。

姐さんたちは、好きで遊女をしているのではない。みんな、親を助けるために借金を背負つて来ている人たちで、親を助ける事情は坊も同じの上だった。一人の姐さんが「坊も可哀想なんだ。兄ちゃん、さっきの五十銭銀貨返してやつてちょー。私が払うだ」と、財布から三銭を取り出し、坊の持つている釣銭と合わせて交換した。

「みたらし、三本おくんな」

「おつ」と、兄さんは威勢よくみたらしを五本へぎ、（木を薄く削いで舟形にしたもの）に載せてくれた。「さ、三本です」

「ええだわ、勘定は三本だ」

この店には、郭の姐さんたちも何人か来ている

「坊が買い食いするのは、珍しいでにやーか」と、一人の姐さんが言った。すると、つづいて「そうだ。この子は学校から帰ると毎日この街へ配達に来て、仕事が済むと一目散に帰るのに、今日はどうしやーた」

と別の姐さんが言った。さらに、もう一人の姐さんが「坊。いつもお金持つてにやーのに、今日はどうしやーた？ さっき、兄ちゃんに五十銭出したでにやーか」

姐さんたちは、昼間は暇だから坊のことに興味津々の様子だった。

三人の姐さんは、じいーつと坊を見つめている。しばらく沈黙の間があつて、坊は、仕方なく「もろた」と答えた。

「ええつ。坊、五十銭も誰がくれただか」

「……」

坊は、どう答えたものかと迷う。みたらし団子を食べる余裕もなくなつてしまった。

「誰だか。そんな豪儀な人は？」

姐さんたちは、ますます興味を示す。坊は、仕方なく「村



奥田 登

おくだ のぼる

- 1927 (昭和2年) 生まれ
- 42 高小卒
- 43 鉄道省梅小路駅就職
- 79 大阪鉄道管理局広報課長
- 83 国鉄退職
- 97 精華町議会議員
- 2009 精華町議会議員任期満了

受賞の言葉

奥田 登

昭和十三年(一九三八)口減らしのために、紀勢線相可口駅(現・多気)から一区間のキップで汽車に乗った。小学五年生の夏、村では合歓が盛りだった。亀山あたりで車掌の検札があった。「名古屋の大曾根まで行きたい。迎えに来てくれる年季先の人を雇うてくれますよ」と頼んだ。デッキに連れ出されて車掌は険しい顔だったが、「年季に行くの?」と聞き返してからは優しい顔になって、「鉄道省には、運賃着払いの制度はないよ」と言ったがひどく叱りはしなかった。

「僕の任務は、君を次の駅で降ろして駅員に引き継ぐことだが、降りるかね」次の駅で降ろされてはおっ母あが困るので「ごめんしておくんな」と頼んだ。

車掌は、しばらく考えてから「こんな取り扱いはないけれどなあ」と言いながら、ノリホ(乗車人員報告書)の裏に

「乗越。所持金なし。着駅で出迎えが支払う。ナコレクカレチ ヨロ」(名古屋車掌区 乗客専務車掌 よろしく)という意味らしかった。そしてもう一枚に「五年生偉いぞ。年季がんばれ」と書いたのをくれた。大曾根駅に着くと、年季先の洗濯屋のおかみさんが、いつ着くか分からないので、改札係に必要な金と店までの手描き地図を預けてくれた。

このようにして始まった私の年季奉公でした。この度、この自伝エッセーが認められ今後の大きな励みになります。ありがとうございます。

随筆集

移ろいのなかで

榎並 掬水



「坊。これ取つときゃーせ。私が払つただで」と言つて五十銭銀貨を返してくれた。そして

「敷布てよー、いくらぐらいするもんだろーかにゃー」と言つた。三人は、誰も敷布の値段は知らない。

「五十銭ぐらいだろうか」「どうだろう、それぐらいだろうか」

姐さんたちは、いろいろ言いながら相談していたが、一人の姐さんが

「よしつ。六十銭にしとこみゃー。一人二十銭ずつ出せば六十銭になるだで、どうでゃー」「そうだ」「そうだなも」と後の二人も賛成して、「坊。洗濯屋の主人に謝つてこれで弁償しやーせ。えか」

坊は、とうとう姐さんたちから六十三銭をもらつてしまった。「おおききな」

姐さん三人は、大はしゃぎをしている。坊は、姐さんたちのこんなに明るい顔を見るのは、この街で初めてだった。七十年経つた今も、あの時、おじさんのガマ口が「パチン」と閉まつた音や、姐さんたちの明るい声が耳に残っている。みたらし団子は、あの時と同じ香ばしい匂いを放っている。

「みたらし、三本ください」

我が国には再びない中国北京での
少年の目から見た植民地生活の反省と回顧録

蘆溝橋

定価 1300 円 (送料込)

東山昇 著 遠足の頃

千葉日報社刊

注文先 アジア文化社 ※御希望の方はアジア文化社に御連絡下さい。

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp